

豊 後 府 内 14

中世大友府内町跡第30次調査

一般国道10号古国府拡幅事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書(6)

2010

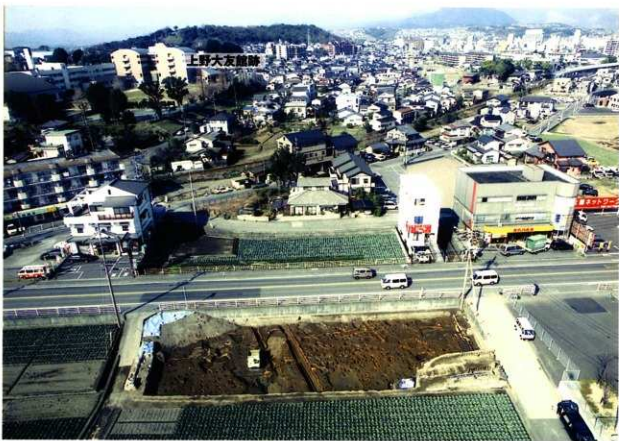
大分県教育庁埋蔵文化財センター



中世大友府内町跡第30次調査区全景写真



中世大友府内町跡第30次調査区（南から）



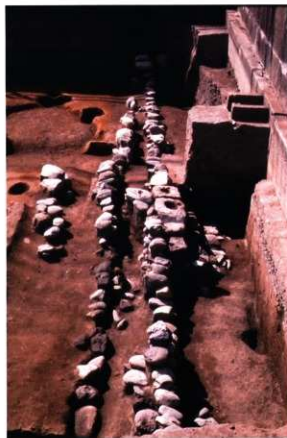
中世大友府内町跡第30次調査区（東から）



SX012 (石積)



SX012 (石積) 西から



SX012 (石積) 東から



SX012の石段部分



石段の拡大写真



SX012石横断面写真 (街路)

序 文

本書は、大分県教育委員会が、国土交通省大分河川国道事務所の依頼を受けて実施した国道10号古国府拡幅事業に伴う中世大友府内町跡の発掘調査報告書です。

遺跡の所在する大分市は、古代に国府が置かれて以来、豊後国・大分県の政治・経済の中心地としての役割を果たしてきました。特に、戦国時代には、「府内」と呼ばれ、豊後国の領主であった大友氏の本拠地として、南蛮貿易やキリスト教の日本布教の拠点となるなど、日本の中世都市の中でも、特異な存在でした。

中世大友府内町跡30次調査は、「府内古図」に描かれる万寿寺の南側を発掘することになりました。その結果、調査区の北側で東西方向の街路の跡を検出し、九州最大級の禅宗寺院であった万寿寺の南側の状況を明らかにすることができました。また、調査区は町屋跡であり、14世紀初頭からの遺構や遺物が検出され、徳治元年（1306）の創建と伝えられる万寿寺と密接に関連することが想定できます。

本書が埋蔵文化財に対する保護・啓発、さらには学術研究の一助として活用されれば幸いです。

最後に、この発掘調査に多大な御支援と御協力をいただきました関係各位に対し衷心から感謝申し上げます。

平成22年3月31日

大分県教育庁埋蔵文化財センター

所 長 佐 藤 英 一

例 言

1. 本書は、大分市元町に所在する中世大友府内町跡第30次調査の発掘調査報告書である。
 2. 発掘調査は一般国道10号古国府拡幅事業の実施に伴い、国土交通省九州地方整備局大分河川国道事務所の委託を受けて、大分県教育委員会が実施した。
 3. 中世大友府内町跡第30次調査は平成15年5月から平成15年3月にかけて実施した。
 4. 現地での写真撮影・遺構の実測は調査担当者が行ったほか、明大工業に委託した。
 5. 遺物実測・トレースなど報告書作成に伴う諸作業については、埋蔵文化財センター文化財発掘調査員並びに大分県教育庁埋蔵文化財センターの整理事業員の協力を得た。
 6. 出土遺物ならびに図面・写真等は、大分県教育庁埋蔵文化財センター（大分市大字中判田ビワノ門1977）において保管している。
 7. 本書で使用する方位はいずれも座標北である。座標値については、旧日本測地系の数値を記している。
 8. 本書で使用する遺構略号は、以下の通りとする。
SD：溝、SK：土坑、SE：井戸、SP：柱穴および小穴、SX：その他の遺構（不明遺構・集石遺構・整地層など）
 9. 本書で使用した出土遺物の分類については、以下の文献による。
青花 小野正敏「15～16世紀の染付碗・皿の分類と年代」（『貿易陶磁研究』No.2 1982年）
青磁 上田秀夫「14～16世紀の青磁碗の分類について」（『貿易陶磁研究』No.2 1982年）
白磁 森田 勉「14～16世紀の白磁の分類について」（『貿易陶磁研究』No.2 1982年）
備前系陶器
 乗岡 実「中世備前焼壺（壺）の編年案」・「備前焼播鉢の編年案」（『第3回中近世備前焼研究会資料 付 第1回・第2回研究資料』所収 2000年）
中国南部産焼締陶器鉢
 吉田 寛「中世大友府内町跡出土の産地不明焼締陶器について」（『貿易陶磁研究』No.28 2003年）
京都系土師器および土師質土器
 塩地潤一「九州出土の京都系土師器皿」（『中近世土器の基礎研究』XIV 1999年）
 坂本嘉弘「中世大友府内町跡出土の土師質土器編年」（『豊後府内2』大分県教育庁埋蔵文化財センター調査報告書第2集 2005年）
吉備系土師器碗
 山本悦代「吉備系土師器碗の成立と展開」（『鹿田遺跡－第5次調査－（医学部および阿付属病院管理棟新設予定地）』岡山大学構内遺跡発掘調査報告書第6冊 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター 1993年）
10. 本書の執筆・編集は坂本嘉弘が行った。

目 次

第1章 はじめに	
第1節 調査に至る経過	1
第2節 調査の経過	1
第3節 調査組織の構成	2
第4節 報告書作成にあたって	5
1. 府内古園と街路の名称	5
2. 本書の調査区位置	5
第2章 遺跡の立地と環境	
第1節 地理的環境	6
第2節 歴史的環境	6
第3章 調査の方法と成果	
第1節 調査の概要	9
1. 調査の経過	9
2. 遺構・遺物の概要	9
第2節 遺構と遺物	15
1. 溝	15
2. 土坑	28
3. 井戸	125
4. 石積遺構	129
5. 柱穴状遺構	136
6. 包含層（整地層）	142
第4章 総括	
第1節 14世紀代の土師質土器	164
1. 中世大友府内町跡の14世紀代の土師質土器	164
2. 14世紀代の在地系土師質土器と他地域の遺物	165
3. 中世大友府内町跡の14世紀代の土師質土器の編年	166
第2節 豊後府内の万寿寺の範囲について	167

報告書抄録

挿 図 目 次

第1章

第1図	中世大友府内町跡発掘調査状況	3
-----	----------------	---

第2図	府内古園と街路名称	5
-----	-----------	---

第2章

第3図	大分平野の地形と主要遺跡	7
-----	--------------	---

第4図	中世大友府内町跡と周辺の中世遺跡	8
-----	------------------	---

第3章

第5図	府内町跡第30次調査選標配置図(折込)	13~14
第6図	SD051実測図	15
第7図	SD051出土遺物実測図①	16
第8図	SD051出土遺物実測図②	17
第9図	SD137実測図	18
第10図	SD137出土遺物実測図①	19
第11図	SD137出土遺物実測図②	20
第12図	SD137出土遺物実測図③	21
第13図	SD137出土遺物実測図④	22
第14図	SD137出土遺物実測図⑤	23
第15図	SD137出土遺物実測図⑥	24
第16図	SD137出土遺物実測図⑦	25
第17図	SD137出土遺物実測図⑧	26
第18図	SD137出土銅銭実測図	26
第19図	SD156実測図	27
第20図	SD156出土遺物実測図①	27
第21図	SD156出土遺物実測図②	27
第22図	SK002出土銅銭実測図	28
第23図	SK002出土遺物実測図	29
第24図	SK003実測図	30
第25図	SK003出土遺物実測図	30
第26図	SK007実測図	31
第27図	SK007出土遺物実測図①	32
第28図	SK007出土遺物実測図②	33
第29図	SK007出土遺物実測図③	34
第30図	SK007出土遺物実測図④	35
第31図	SK007出土遺物実測図⑤	36
第32図	SK007出土遺物実測図⑥	37
第33図	SK007出土遺物実測図⑦	38
第34図	SK007出土遺物実測図⑧	39
第35図	SK007出土遺物実測図⑨	40
第36図	SK007出土遺物実測図⑩	41
第37図	SK007出土銅銭実測図	42
第38図	SK008実測図	42
第39図	SK008出土遺物実測図	43
第40図	SK009実測図	44
第41図	SK009出土遺物実測図①	45
第42図	SK009出土遺物実測図②	46
第43図	SK009出土遺物実測図③	47
第44図	SK010実測図	47
第45図	SK010出土遺物実測図	48
第46図	SK011実測図	48
第47図	SK011出土遺物実測図	48
第48図	SK011出土青銅製品実測図	48
第49図	SK016実測図	49
第50図	SK015・SK016出土遺物実測図	49
第51図	SK015・SK016出土銅銭実測図	49

第52図	SK020実測図	50
第53図	SK020出土遺物実測図	51
第54図	SK022出土遺物実測図①	52
第55図	SK022実測図	53
第56図	SK021-023-027-029-031出土遺物実測図	54
第57図	SK022出土遺物実測図②	55
第58図	SK023出土遺物実測図	55
第59図	SK030実測図	55
第60図	SK036実測図	56
第61図	SK036出土遺物実測図	56
第62図	SK034・037-042-047-048-053-061-063-067-091出土遺物実測図	57
第63図	SK040実測図	58
第64図	SK040出土銅銭実測図	59
第65図	SK040出土遺物実測図	59
第66図	SK052・SP1200実測図	60
第67図	SK052出土遺物実測図	60
第68図	SK054実測図	61
第69図	SK054出土銅銭実測図	61
第70図	SK054出土遺物実測図	62
第71図	SK059出土銅銭実測図	63
第72図	SK059実測図	63
第73図	SK059出土遺物実測図	64
第74図	SK060実測図	65
第75図	SK060出土遺物実測図	65
第76図	SK066実測図	66
第77図	SK066出土遺物実測図	66
第78図	SK071実測図	67
第79図	SK072実測図	67
第80図	SK074実測図	67
第81図	SK071-072-074-075-077-078出土遺物実測図	68
第82図	SK075実測図	69
第83図	SK077実測図	70
第84図	SK078実測図	70
第85図	SK078出土銅銭実測図	70
第86図	SK079実測図	71
第87図	SK079・083・085出土遺物実測図	71
第88図	SK083実測図	72
第89図	SK085実測図	72
第90図	SK086実測図	72
第91図	SK086出土遺物実測図①	73
第92図	SK086出土遺物実測図②	74
第93図	SK086出土遺物実測図③	75
第94図	SK086出土遺物実測図④	76
第95図	SK086出土銅銭実測図	76
第96図	SK090実測図	77
第97図	SK090出土遺物実測図①	78
第98図	SK090出土遺物実測図②	79

第 99 回	SK090 出土銅錢実測図	79
第100回	SK101・102・111・114・122・131・133 136出土遺物実測図	80
第101回	SK109実測図	81
第102回	SK109上層出土遺物実測図①	82
第103回	SK109上層出土遺物実測図②	83
第104回	SK109上層出土遺物実測図③	84
第105回	SK109上層出土遺物実測図④	85
第106回	SK109上層出土遺物実測図⑤	86
第107回	SK109下層出土遺物実測図①	87
第108回	SK109下層出土遺物実測図②	88
第109回	SK109出土銅錢実測図	89
第110回	SK123実測図	89
第111回	SK123・124出土遺物実測図	90
第112回	SK123出土銅錢実測図	90
第113回	SK124実測図	91
第114回	SK127実測図	91
第115回	SK127出土遺物実測図	91
第116回	SK128実測図	92
第117回	SK128・129・130・134出土遺物実測図	92
第118回	SK130実測図	93
第119回	SK134実測図	94
第120回	SK140実測図	95
第121回	SK140・141・143出土遺物実測図	96
第122回	SK144実測図	97
第123回	SK144出土遺物実測図	98
第124回	SK144・145出土遺物実測図	99
第125回	SK144出土鉄製品実測図	100
第126回	SK145実測図	101
第127回	SK146実測図	101
第128回	SK146出土遺物実測図	102
第129回	SK146出土遺物実測図	102
第130回	SK150実測図	103
第131回	SK154実測図	103
第132回	SK155実測図	103
第133回	SK154・155出土遺物実測図	104
第134回	SK155出土遺物実測図①	105
第135回	SK155出土遺物実測図②	106
第136回	SK158実測図	107
第137回	SK158出土遺物実測図	107
第138回	SK171実測図	108
第139回	SK164・169・170・171出土遺物実測図	108
第140回	SK183実測図	109
第141回	SK183出土遺物実測図	110
第142回	SK173・180・183・187・195・196・197 出土遺物実測図	111
第143回	SK184実測図	112
第144回	SK193実測図	113
第145回	SK193出土遺物実測図①	114
第146回	SK193出土遺物実測図②	115
第147回	SK196実測図	116
第148回	SK202実測図	116
第149回	SK202・203・206出土遺物実測図	116
第150回	SK204実測図	117
第151回	SK216実測図	117
第152回	SK216・224・226・227・230・231出土遺物実測図	118

第153回	SK224実測図	119
第154回	SK220・SP221実測図	119
第155回	SK220出土遺物実測図	120
第156回	SK233実測図	121
第157回	SK234実測図	121
第158回	SK233・234・240出土遺物実測図	122
第159回	SK244実測図	123
第160回	SK248実測図	123
第161回	各土坑出土銅錢実測図	123
第162回	SE013実測図	124
第163回	SE013出土遺物実測図①	125
第164回	SE013出土遺物実測図②	126
第165回	SE126実測図	126
第166回	SE126出土遺物実測図	127
第167回	SE142実測図	128
第168回	SE142出土木製品実測図	128
第169回	SE142出土銅製品実測図	128
第170回	SE142出土銅錢実測図	128
第171回	SX01実測図	129
第172回	SX012中央部土層断面実測図	130
第173回	SX012出土遺物実測図	130
第174回	SX012出土埴実測図	131
第175回	SX012出土銅錢実測図	131
第176回	SX207実測図	132
第177回	SX207出土遺物実測図①	133
第178回	SX207出土遺物実測図②	134
第179回	SX207出土遺物実測図③	135
第180回	SX207出土銅錢実測図	136
第181回	SP1496・1497・1498・1506・1538実測図	136
第182回	各柱穴内出土遺物実測図①	137
第183回	各柱穴内出土遺物実測図②	138
第184回	各柱穴内出土遺物実測図③	139
第185回	各柱穴内出土銅錢①	140
第186回	各柱穴内出土銅錢②	141
第187回	包含層出土遺物実測図①	143
第188回	包含層出土遺物実測図②	144
第189回	包含層出土遺物実測図③	145
第190回	包含層出土遺物実測図④	146
第191回	包含層出土遺物実測図⑤	147
第192回	包含層出土遺物実測図⑥	148
第193回	包含層出土遺物実測図⑦	149
第194回	包含層出土遺物実測図⑧	150
第195回	包含層出土遺物実測図⑨	151
第196回	包含層出土遺物実測図⑩	152
第197回	包含層出土遺物実測図⑪	153
第198回	包含層出土遺物実測図⑫	154
第199回	包含層出土遺物実測図⑬	155
第200回	包含層出土遺物実測図⑭	156
第201回	包含層出土遺物実測図⑮	157
第202回	包含層出土遺物実測図⑯	158
第203回	包含層出土遺物実測図⑰	158
第204回	包含層出土遺物実測図⑱	159
第205回	包含層及び丁区出土銅錢実測図	160
第206回	K75区出土銅錢実測図①	161
第207回	K75区出土銅錢実測図②	162
第208回	L77区出土銅錢実測図	163

第4章

第209 府内町跡第30次調査区とその周辺・・・168

表 目 次

第1章

第1表 中世大友府内町跡発掘調査一覧表(1)・・・2

第2表 中世大友府内町跡発掘調査一覧表(2)・・・4

第2章

第3章

第3表 主要遺構一覧表(1)・・・10

第5表 主要遺構一覧表(3)・・・12

第4表 主要遺構一覧表(2)・・・11

遺物観察表

第6表 遺物観察表-土器・陶磁器類-(1)・・・171

第20表 遺物観察表-土製品-(1)・・・185

第7表 遺物観察表-土器・陶磁器類-(2)・・・172

第21表 遺物観察表-土製品-(2)・・・186

第8表 遺物観察表-土器・陶磁器類-(3)・・・173

第22表 遺物観察表-木製品・・・186

第9表 遺物観察表-土器・陶磁器類-(4)・・・174

第23表 遺物観察表-石製品-(1)・・・186

第10表 遺物観察表-土器・陶磁器類-(5)・・・175

第24表 遺物観察表-石製品-(2)・・・187

第11表 遺物観察表-土器・陶磁器類-(6)・・・176

第25表 遺物観察表-ガラス製品・布・・・188

第12表 遺物観察表-土器・陶磁器類-(7)・・・177

第26表 遺物観察表-金属製品-(1)・・・189

第13表 遺物観察表-土器・陶磁器類-(8)・・・178

第27表 遺物観察表-金属製品-(2)・・・189

第14表 遺物観察表-土器・陶磁器類-(9)・・・179

第28表 遺物観察表-瓦-(1)・・・189

第15表 遺物観察表-土器・陶磁器類-(10)・・・180

第29表 遺物観察表-瓦-(2)・・・190

第16表 遺物観察表-土器・陶磁器類-(11)・・・181

第30表 遺物観察表-銅銭-(1)・・・190

第17表 遺物観察表-土器・陶磁器類-(12)・・・182

第31表 遺物観察表-銅銭-(2)・・・191

第18表 遺物観察表-土器・陶磁器類-(13)・・・183

第32表 遺物観察表-銅銭-(3)・・・192

第19表 遺物観察表-土器・陶磁器類-(14)・・・184

調査抄録

写 真 図 版 目 次

巻頭カラー図版

巻頭図版1 中世大友府内町跡第30次調査区全景

巻頭図版2 中世大友府内町跡第30次調査区(南から)

巻頭図版3 SX012(石積)

中世大友府内町跡第30次調査区(東から)

SX012(石積)(西から)

巻頭図版4 SX012の石段部分

SX012(石積)(東から)

石段部分の拡大写真

SX012の石積断面写真(街路)

写真図版

写真図版1 SK006・SK007・SK008・SK011

写真図版5 SK109・SK111・SK123・SK126

SE013上部・SE013井戸側・SK015

SK134・SK136・SK137・SE141・・・199

SK016・・・195

写真図版6 SK140・SE142・SK148・SK150

写真図版2 SK020・SK024・SK028・SK029

SK154・SK155・SK158・・・200

SK030・SK036・SK037・SD051・・・196

写真図版7 SK164・SK172・SK183・SK193

写真図版3 SK052・SK053・SK054・SK059

SX207・・・201

SK066・SK067・SK069・SK074・・・197

写真図版8 SX207・SK219・SK224・SK234

写真図版4 SK072・SK074・SK077・SK079

SK240・SP1098・SP1234・・・202

SK085・SK086・SK090・SK091・・・198

第1章 はじめに

第1節 調査に至る経過

別府湾沿岸は、瀬戸内海を通じて古代から、九州の玄関口としての役割を果たしてきた。中でも大分川左岸地域は、中世・近世・近代を通じ、豊後国・大分県の行政・経済の中心地として発展してきた。特に明治以降、瀬戸内海路に加え、鉄道の敷設や道路網の整備など、陸上交通の発達で顕著になると、県庁所在地である大分市は、東九州の交通の要衝となった。そうした中、明治44年に大分駅が近世城下町の外堀の南に建設されると、周辺は大分県の物流の中心地となり、以後太平洋戦争による空襲の打撃を受けながらも、今日まで発展を遂げた。

ところが、昭和40年代以降の自動車交通量の増加は、大分駅周辺の交通状況に変化を起し、鉄道と道路の平面交差部分では交通障害を引き起こす結果となった。そこで、これらを解消するため昭和45年、「大分市国鉄路線高架化促進期成同盟会」が設立され、25年後の平成7年に大分駅周辺総合整備事業の「大分駅付近連続立体交差事業」として採択された。このため、国道10号線も鉄道の跨線橋である万寿橋を解消する必要が生じた。国土交通省はこれに併せ、道路を拡幅し、顕徳町交差点付近の交通混雑の緩和、沿道環境の改良、交通事故の防止など、道路交通の安全と円滑化を計るため、「国道10号古国府拡幅事業」を計画した。

一方、大分川左岸沿いには、自らキリスト教に改宗し、南蛮貿易を行った戦国大名である大友宗麟の城下町「府内」があることが、古絵図から知られていた。この古絵図には、大友館・万寿寺など当時の主要な建物の位置や、街路・町屋の配置などが明瞭に描かれ、都市の構造を伝えるものであった。その位置は昭和31年に刊行された大分市史の段階で、大友館や万寿寺をほぼ特定できたが、使用できる地形図の問題もあり、精度に欠けていた。その後、昭和63年に刊行された大分市史・中巻では新たに府内古図が確認されたこともあり、明治時代の地籍図と照合し、さらに現在の地図に置き換えた。その結果、現在の地図上に高い精度で、戦国時代の「府内」を再現することができた。その規模は、大分川沿いの東西約0.7km、南北2.2kmで、現在「中世大友府内町跡」として周知遺跡となっている。

「一般国道10号古国府拡幅事業」は、この戦国時代の「府内」を南北に貫く土木工事となり、しかもこの町の中枢部である大友館の東側を通過するものであった。そこで、大分県教育委員会は、事業主体者である国土交通省と協議を行い、工事に先立ち発掘調査を実施することとなった。

第2節 調査の経過

大分県教育委員会は「一般国道10号古国府拡幅事業」に伴う、中世大友府内町跡の発掘調査を、平成12年6月から開始した。しかし、この遺跡に対する発掘調査は、平成8年から大分市教育委員会が大分駅南地区の区画整理事業に伴う、移転先の宅地造成地や民間開発などに対応し実施しており、同じ遺跡を2つの組織が発掘調査する状況であった。そこで大分市教育委員会と協議を行い、遺跡全体を当時の遺跡名である「中世大友府内町跡」とするが、大友館部分は「大友氏館跡」、町屋跡部分は「府内町跡」として県教育委員会と市教育委員会が重複することなく発掘調査着手順に調査次数を重ねることとした。

こうして、「一般国道10号古国府拡幅事業」の最初の調査として「府内町跡第9次調査」が、開始された。その後、国土交通省と協議を重ねながら、用地が取用された順に発掘調査を行い、平成20年度末の現時点では、用地のほぼ90%を完了している。この間、平成16年度からは文化課から独立した調査組織となった大分県教育庁埋蔵文化財センターが発掘調査を担当し、平成21年度現在もこの事業に伴う発掘調査を継続している。

大友館

中世大友府内町跡

大友氏館跡
府内町跡



第1図 中世大友城下跡発掘調査状況 (番号は調査回数 70・74は地図の範囲外) 2008年12月末現在

第3節 調査組織の構成

調査指導者	河原純之（千葉大学文学部教授・川村学園女子大学教授） 後藤宗俊（別府大学文学部教授） 小野正敏（国立歴史民俗博物館助教授） 坂井秀弥（文化庁記念物課蔵文化財担当主任調査官）
平成15年度	文化課長 今永一成 参事兼課長補佐 麻生祐治 参事兼課長補佐 清水宗昭 受託事業担当主幹 坂本嘉弘（府内町跡35次調査） 副主幹 友岡信彦（府内町跡34次調査） 主査 吉田 寛（府内町跡28次調査） 主査 矢部勝徳（府内町跡35次調査） 主査 後藤見一（府内町跡29次調査） 主事 恒賀健太郎（府内町跡30次調査） 文化財発掘調査員 加藤美成子 文化財発掘調査員 服部真知 文化財発掘調査員 井上素裕 文化財発掘調査員 畔津宏幸

第2表 中世大友府内町跡発掘調査一覧表（2）

調査次数	調査機関	調査年度	事業名	調査場所	報告書刊行	調査内容
府内町跡50次	大分市教委	平成16年度	個人住宅 浄化槽	ノコギリ町・街道		御座場の西側の街道と御座
府内町跡51次	大分市教委	平成17年度	国道10号拡幅	第2南北道路・御内町	平成22年3月	万寿寺西北隅・大友館東西間
府内町跡52次	大分県教委	平成17年度	国道10号拡幅	第2南北道路・大友氏館	平成22年3月	第2南北道路・大友館の東部
府内町跡53次	大分市教委	平成17年度	桜ヶ丘雨水幹線	万寿寺西側の堀	平成21年3月	
府内町跡54次	大分市教委	平成17年度	浄化槽	教名寺の東		
府内町跡55次	大分県教委	平成17年度	法原佐野堀	御座場	平成20年3月	地下蔵？
府内町跡56次	大分市教委	平成17年度	加藤補助（東国陣跡）	御座場		
府内町跡57次	大分市教委	平成17年度	市下水道	名ヶ小路町	平成21年3月	
府内町跡58次	大分市教委	平成17年度	J・P・オート建設	御内小路町		
府内町跡59次	大分市教委	平成17年度	下水道工事	坂町	平成21年3月	
府内町跡60次	大分市教委	平成17年度	桜ヶ丘雨水幹線	万寿寺西側の堀	平成21年3月	
府内町跡61次	大分県教委	平成17年度	J R 大友高菜	瑞光寺	平成20年3月	
府内町跡62次	大分市教委	平成17年度	瑞光講堂	第1南北道路		街路跡
府内町跡63次	大分市教委	平成18年度	瑞光講堂	御西町		
府内町跡64次	大分市教委	平成17年度	アパート建設	御西町		
府内町跡65次	大分市教委	平成17年度	瑞光講堂	御西町		
府内町跡66次	大分市教委	平成17・18年度	瑞光講堂	御西町・大友館		
府内町跡67次	大分市教委	平成18年度	国道10号拡幅	坂町・御内小路町	平成22年3月	
府内町跡68次	大分市教委	平成18年度	国道10号拡幅	万寿寺	平成21年3月	
府内町跡69次	大分市教委	平成18年度	法原佐野堀	御座場・名ヶ小路・ノコギリ町	平成22年3月	街路跡・井戸・町原
府内町跡70次	大分市教委	平成18年度	市下水道工事	来羽寺		
府内町跡71次	大分市教委	平成18年度	J R 大友高菜	瑞光寺	平成21年3月	
府内町跡72次	大分市教委	平成18年度	国道10号拡幅	教名寺		名ヶ小路・教名寺堀
府内町跡73次	大分市教委	平成18年度	桜ヶ丘雨水幹線	万寿寺西側の堀	平成21年3月	
府内町跡74次	大分市教委	平成18年度	民間共同住宅建築	大塚院の北側	平成19年3月	
府内町跡75次	大分県教委	平成18年度	法原佐野堀	御座場・名ヶ小路	平成22年3月	第2南北道路・一括発掘
府内町跡76次	大分県教委	平成18年度	国道10号拡幅	教名寺		
府内町跡77次	大分市教委	平成18年度	瑞光講堂	御座場・ノコギリ町	平成22年3月	御座場
府内町跡78次	大分市教委	平成18年度	国道10号拡幅	第2南北道路	平成22年3月	
府内町跡79次	大分市教委	平成19年度	国道10号拡幅	第2南北道路	平成22年3月	
府内町跡80次	大分市教委	平成19年度	国道10号拡幅	教名寺		第2南北道路・教名寺跡
府内町跡81次	大分市教委	平成19年度	民間共同住宅建築	中之町付茂	平成21年3月	溝状遺構・井戸
府内町跡82次	大分市教委	平成20年度	個人住宅（瑞光）	名ヶ小路町		街路跡
府内町跡83次	大分市教委	平成20年度	民間（京橋電設）	今道西		第1南北道路跡
府内町跡84次	大分市教委	平成20年度	民間（病院建設）	中之町		
府内町跡85次	大分市教委	平成21年度	民間（商業施設）	中町		
府内町跡86次	大分市教委	平成21年度	国庫補助（東国陣跡）	御座場		跡跡・溝
府内町跡86次2	大分市教委	平成21年度	国庫補助（東国陣跡）	御座場		住居状遺構
府内町跡85次3	大分市教委	平成21年度	国庫補助（東国陣跡）	ノコギリ町		井戸・高倉1号
府内町跡86次4	大分市教委	平成21年度	国庫補助（東国陣跡）	ノコギリ町		井戸・竪立柱建物
府内町跡86次5	大分市教委	平成21年度	国庫補助（東国陣跡）	ノコギリ町		井戸
府内町跡86次6	大分市教委	平成21年度	国庫補助（東国陣跡）	御座場		溝・住居内礎石建物
府内町跡86次7	大分市教委	平成21年度	国庫補助（東国陣跡）	御座場		住居内礎石建物
府内町跡86次8	大分市教委	平成21年度	国庫補助（東国陣跡）	ノコギリ町		住居内礎石建物

第4節 報告書作成にあたって

1 府内古園と街路の名称

府内古園

戦国時代に豊後の中心であった府内を描いた「府内古園」は、現在3種類12枚が確認されている。「府内古園」は、その研究によるとA類・B類・C類に分類され、成立年代は寛永13年(1634)を遡らず、新しくなるほど文字情報が増えることが明らかにされている。すなわち、A類には見られない「御蔵場」の名称はC類のみに見られ、万寿寺西側の「柳町」の名称もB・C類、大友館の東北部の「称名寺」の名称は、B類のみ書き込まれている。しかし、「府内古園」に描かれている、4本の南北の街路と5本の東西の街路名についてはいずれの「府内古園」にも記載されていない。このため、近年の研究では様々な仮称が冠されてきた。

街路

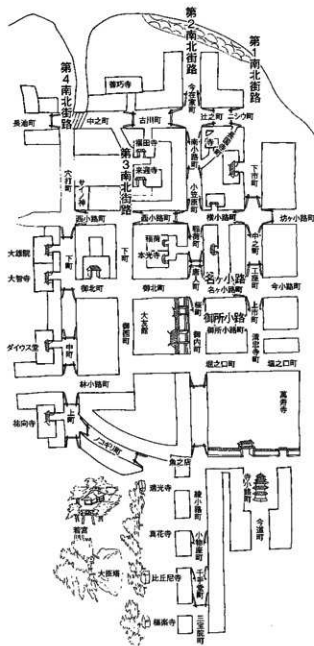
そこで、報告書作成にあたり、こうした「府内古園」間の不整合と名称の無い街路の呼び方を統一・解消する必要が生じ、大分川側から「第1南北街路」・「第2南北街路」・「第3南北街路」・「第4南北街路」とした。「街路」の名称を選択したのは、ルイス・フロイスの「日本史」、及び宣教師達の書翰や年報の訳文が府内の道路を「街路」と記述されており、都市内の道路の意味でこの名称を使用する。また東西の道路については、御所小路町・名ヶ小路町等の道路名を含む町名があるため、それらについては「御所小路」・「名ヶ小路」とした。

2 本書の調査区位置

中世大友城下町跡の発掘調査は、土地取用状況に合わせて、国土交通省から委託を受け実施している。このため、連続して隣接地を発掘調査することは稀である。そこで、報告書を作成するにあたり、遺構の連続性を考慮し、調査年度が異なっても、隣接した調査区をまとめて刊行している。

そうした中、本書の府内町跡30次調査は、平成15年度に実施した調査で、古国府拡張事業の調査対象域の最南端にあたる。

この地域は万寿寺の南側と想定され、府内古園に描かれる「魚之町」・「後小路町」の裏手と考える。周辺の調査区は平成11年に府内町跡第6次調査、平成15年に府内町跡第35次調査として実施した万寿寺の境内地の調査がある。

魚之町
後小路町

第2図 府内古園と街路名称
(府内古園A類をトレースし一部変更)

第2章 遺跡の立地と環境

第1節 地理的環境

大分はその名称が示すように、平野を丘陵や河川が分断した地形をしており、各所に小規模な平野が展開する。この中で、大分川の左岸から西側にかけて広がる小地域は、中世以降今日に至るまで、豊後国・大分県の実質的な中心地となっている。この地域は、東側を大分川が北流し、北側には別府湾が広がり、南側は高崎山系から東に延びる標高約40～30mの上野丘陵が横たわり、西側は高崎山(628m)へと続く標高80mから100mの起伏の激しい丘陵に囲まれている。

こうした地域の中で、中世大友府内町跡は東部の大分川沿いに形成された都市遺跡である。府内古図に描かれている範囲は、北は現在に比べ西側に大きく曲がっている河口部から、南は上野丘陵の先端部と大分川が接する部分にあたる。現在の標高は河口に近い北部で約4m、上流の南部地域で約6mの自然堤防上に立地する。

北と東側は別府湾と大分川に限られるが、遺跡の南西部から西側の限りは、試掘調査の結果や、元地形が残されている部分の観察から、低湿地の広がりが確認された。この部分は1950年代までレンコンを栽培していたと伝えられている。この低湿地は上野丘陵の裾を巡り、北の別府湾方向に伸び、府内古図に描かれる舟入に続いている。

中世大友府内町跡が立地する自然堤防は、発掘調査の結果、検出面は粘質土層であるが下部には砂層が厚く堆積している。下部の砂層から縄文時代晩期から古墳時代前期の土器が出土しており、上部からは8世紀頃の遺物が出土している。おそらくこの間に2～3m堆積し形成されたものと考えられる。

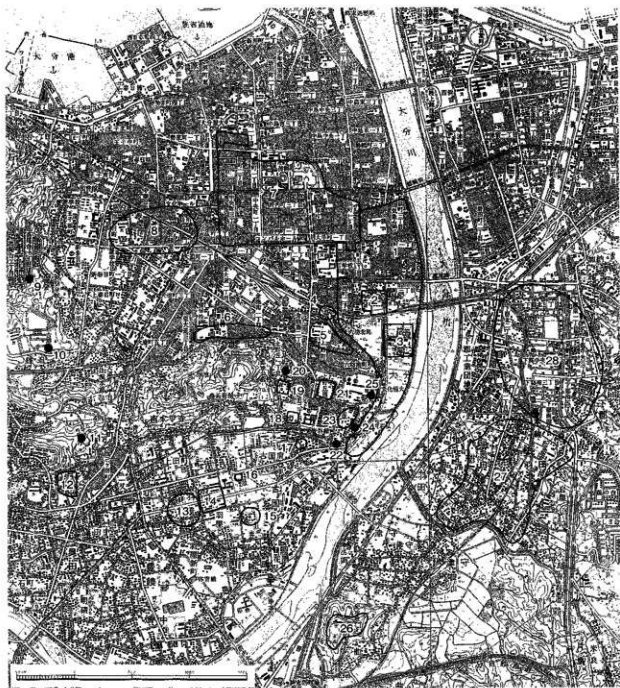
第2節 歴史的環境

別府湾に近い大分川左岸地域化が、豊後のなかでも政治的に特別な地域として注目されるのは7世紀後半である。その代表的な遺跡として国指定史跡として整備されている古宮古墳である。西側の急峻な丘陵地にあるこの古墳は、壬申の乱(672年)で大真人皇子(天武天皇)側について活躍した大分君恵尺(えさか)・稚臣(わかみ)の墓と想定されている。また同時期の重要な遺跡として上野丘陵の南側平野で調査された羽屋井戸遺跡・羽屋園遺跡がある。この遺跡からは、7世紀後半～8世紀初頭の方形の掘り方をもつ大型掘立柱建物や総柱の倉庫群が確認されており、「評」段階の遺構と想定されている。

その後の設置された豊後国府については、羽屋井戸遺跡・羽屋園遺跡の東側に「古国府」の地名が残るものの、政庁本体が未だ不明である。しかし、上野丘陵の東端部で調査された龍王畑遺跡では9世紀から10世紀前半にかけての庇をもつ掘立柱建物や築地跡、道路状遺構が検出され、その配置から、国司館跡の可能性が指摘されている。この遺跡の東北部には8世紀～9世紀にかけての版築基壇に瓦葺の礎石建物が建てられている。さらに、この丘陵の東端部の南側崖面に岩屋寺石仏、東側崖面に元町石仏が刻まれており、平安時代後期の藤原様式の作風と言われている。このように上野丘陵の南側の羽屋地区から古国府地区、そして上野丘陵東部は7世紀後半から10世紀頃にかけて、豊後国の政治の中心地であったと考えられている。

11世紀から13世紀代になると、注目される文書が残されている。まず「宇佐神領大鏡」の天喜元年(1053)、康平2年(1059)、承保4年(1077)に「勝津留島四至」として登場する。その示す範囲は、上野丘陵東部から北に広がる沖積地にあたり、16世紀に大友館が置かれる場所が含まれている。その中で天喜元年の中文に西の限りとして「高国府」の地名が見られ、上野丘陵東端部が想定されている。13世紀中頃、大友氏3代目の大友頼泰が豊後国に守護職として下向した際、「高(隆)

国府」の割譲を強引に求める。このため「高国府」「勝津留岨」については守護所の設置場所と関わる重要な問題となっている。さらに、この申文の中に「東限北廻り、二方市河」とあり、すでに大分川沿いで河原市があり、府内古図に描かれた「府内」の初元的な位置づけがなされている。こ



第3図 大分平野の地形と主要遺跡

1. 中世大友城下町跡 2. 大友氏館跡 3. 万寿寺跡 4. 上野町・顕徳寺遺跡 5. 若宮八幡遺跡
6. 東大進遺跡 7. 府内城・城下町 8. 東田室遺跡 9. 亀甲山古墳 10. 古宮古墳 11. 千人塚古墳
12. 永興遺跡 13. 羽屋園遺跡 14. 金剛宝戒寺跡 15. 石明遺跡 16. 町口遺跡 17. 岩屋寺遺跡
18. 円寿寺 19. 金剛宝戒寺 20. 上野廣寺 21. 大友上原館跡 22. 岩屋寺石仏 23. 龍王畑遺跡
24. 元町石仏 25. 大原塚古墳 26. 守岡遺跡 27. 羽田遺跡 28. 下郡遺跡群

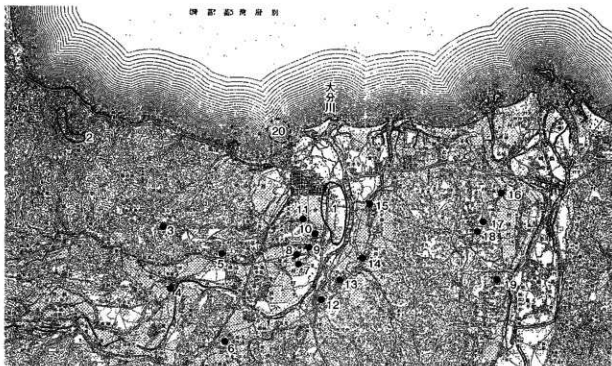
第2節 歴史的環境

新御成敗状 うした様子を裏付けるような豊後府中の状況を表す文書がある。それは仁治3年(1242)の「新御成敗状」で、都市の規範を示す条項が書かれている。この文献資料は、13世紀代に豊後国の中心地である府中が、都市として成立していたことを示している。

府中 しかし、こうした状況は考古資料で証明できているわけではない。「勝津留畠」の範囲の中で新御成敗状が描く「府中」の状況は現時点で考古学的には不明である。ただ、上野丘陵の南側の平野部で調査された石明遺跡では13世紀を中心とした大規模な溝とその内側をさらに小規模な溝で区画する遺構が確認されており、「国府」に隣接した位置でもあり、初期の守護館の指摘もある。

徳治元年 14世紀代になると、徳治元年(1306)に万寿寺が大分川を東に望む自然堤防上に建立されると、この地域での本格的な町づくりが開始される。これまでの中世大友府内町跡の発掘調査で確認されるのはこの時期からで、以降16世紀中頃から後半に最盛期を迎え、17世紀初頭に「府内」が近世の府内城下町建設に伴い移転するまでの遺物や遺構が継続して出土する。

下郡遺跡群 この時期の遺跡は、府内周辺でも多く確認されている。大分川の右岸にある下郡遺跡群や津守・片高地区でも16世紀の方形館や方形区割りをもつ遺構が確認されている。独立性の強い守岡丘陵には山城的存在である。一方上野丘陵には土塁と堀を廻らす上原館があり、その南の古国府地区には町口遺跡、北側にも16世紀の遺跡がある。さらに西方の高崎山の山頂は大友氏の詰城として知られている。このように、16世紀代の府内は、府内古図に描かれていない部分も含め、その構造が論じられている。



第4図 中世大友府内町跡と周辺の中世遺跡

- 1.中世大友府内町跡 2.高崎城 3.金谷迫城 4.賀来氏館跡 5.尼ヶ城跡 6.雄城城跡 7.石明遺跡
- 8.町口遺跡 9.岩屋寺遺跡 10.上野大友館跡 11.東大道遺跡 12.守岡城跡 13.津守遺跡
- 14.片島遺跡 15.下郡遺跡 16.千歳城跡 17.猪野新土井遺跡 18.猪野中原遺跡 19.横尾遺跡
- 20.沖ノ浜(推定地)

第3章 調査の成果

第1節 調査の概要

1 調査の経過

府内町跡第30次調査は、この地点から北に向けて国道10号古府内拡幅事業が施工されるため、この事業に伴う発掘調査の中でも最南部の調査区となる。調査は、平成15年4月末に開始した。「府内古図」に描かれた町屋名では、万寿寺の南、第2南北街路に面した後小路町の裏手、もしくは万寿寺の南を区切る東西方向の街路に面した「魚之店」と想定された。

後小路町
魚之店

調査区の規模は、東西約15m、南北約40mで、約600㎡のほぼ長方形である。調査区内の区割りの名称は、これまでの中世大友府内町跡の発掘調査区の区割り名称を継承し、日本測地系による計測を行い、10m×10mを単位とし、東西方向に西からJ-K-L、南北方向に北から74-78と設定した。このため、北西端の区割り名は、J-74、東南端の区割りはL-78となる。

調査にあたっては、調査区が狭小のため、重機掘削による表土を調査区外に搬出したが、人力発掘による排土置き場を確保するため、調査区を東西方向に半分に分け、西側から開始した。

調査以前は、水田であったため、耕作土を除去すると、赤褐色をした水田の床土層が検出された。その下部には暗茶褐色の遺物包含層がほぼ全面に形成されていた。この包含層は中世の遺物を主体とし、わずかに近世の陶磁器を含んでいた。この西側の半分の調査を終了後、調査区内の排土を搬出し、東側半分の調査を開始した。その結果、調査区のほぼ全面を見渡しながらの調査が可能となり、随時掘り下げを行い、包含層掘削、遺構検出、遺構発掘を繰り返しながら、発掘調査を進行させ、平成16年3月中旬に調査は終了し、埋め戻し作業を行い完了した。

2 遺構・遺物の概要

重機掘削による表土除去作業後に検出された包含層の厚さは約20cmであった。包含層直下で検出されたのは16世紀代を主体とする遺構であった。遺構の種類は、大小の不定形な土坑・柱穴状土坑・井戸・礎石建物・石組遺構・街路状遺構を中心に、調査区の全面で検出された。不定形土坑や井戸の存在は、中世大友府内町跡のこれまでの調査成果から、町屋の裏手の状況との認識があり、調査区の西側を南北に通じる第2南北街路沿いの「後小路町」の裏手とも理解できる。

後小路町

また、調査区の北壁は東西方向に掘削され、埋設された大分川に続く大規模下水溝のコンクリートの壁となっており、この工事で大部分は失われているが、わずかに、中世大友府内町跡で確認されている、土砂を版築状に積み上げる街路の痕跡が観察された。このことから、調査区の北端部は府内古図に描かれる万寿寺南側の築地堀沿いの東西方向街路部分を検出したと考えられる。さらに、この街路に沿った石積みと、入口となる石段を検出し、街路面より高い位置に礎石建物が確認された。こうした、16世紀を主体とする遺構の面を、さらに精査すると、14-15世紀代を中心とする、溝・井戸・規模の異なる土坑等が、やはり調査区の全面で検出された。特に、溝や土坑からは、多量の遺物が廃棄された状態で検出された。特に、吉備系土師器や京部系土師器は、それぞれの地域で14世紀初頭や前葉に属年されているもので、伴う在地系土器の年代観に大きな示唆を与えている。と同時に、万寿寺の創建年代が徳治元年（1306）と伝えられており、この年代とも関連する。

万寿寺南側

吉備系土師器

すなわち、これまで実施されてきた中世大友府内町跡の発掘調査の結果、この14世紀初頭の時期を遡るままでの遺構・遺物は確認されておらず、この中世都市の整備が万寿寺の建立時期と関連すると考えられている。そしてこの時期から、16世紀末-17世紀初頭までの遺構・遺物が継続的に確認されており、中世大友府内町跡の中世都市としての継続期間を示している。

府内町跡30次調査区はその象徴的な地点と言える。

第1節 調査の概要

第3表 主要遺構一覧表(1)

本舞での遺構番号	調査時の遺構番号	遺構の種類	遺構の位置	遺構の時期	特記事項	掲載頁
SK002	S-002	土坑	K-75	16世紀前半		28
SK003	S-003	土坑		16世紀後半		28
SK007	S-007	土坑		16世紀後半	遺構の上面に南北方向の石列	30
SK008	S-008	土坑	J・K-77	16世紀後半	鉄器埋納遺構	42
SK009	S-009	土坑	K-77	16世紀後半	竃地層	44
SK010	S-010	土坑		16世紀後半		46
SK011	S-011	土坑	K-78	16世紀後半		47
SK012	S-012	石棟・石列	J・K・L-74	16世紀後半	万寿寺の曹洞街道に面する施設	129
SE013	S-013	井戸	K-76	14世紀代	結構様	125
SK015	S-015	土坑	K-74・75	不明		48
SK016	S-016	土坑	K-75	16世紀前半		48
SK020	S-020	土坑	J-75	14世紀後半		49
SK021	S-021	土坑	J-75	不明		50
SK022	S-022	土坑	J-77	16世紀後半		50
SK023	S-023	土坑	K-78	16世紀後半		50
SK027	S-027	土坑	K-78	16世紀後半		53
SK029	S-029	土坑	K-75	15世紀中葉		53
SK030	S-030	土坑	J-75	不明	礎を欠損	55
SK031	S-031	土坑	K-76	15世紀前半		55
SK034	S-034	土坑	K-75	14世紀代		56
SK036	S-036	土坑	K-75	14世紀後半～15世紀初葉	竃跡土坑	56
SK037	S-037	土坑	K-75	14世紀代		56
SK040	S-040	土坑	K-74	14世紀末～15世紀前半		58
SK042	S-042	土坑	K-74	16世紀代		58
SK047	S-047	土坑	K-75・76	不明		59
SK048	S-048	土坑	K-76	14世紀後半		59
SK050	S-050	土坑	J-74	不明		60
SD051	S-051	溝		14世紀後半		15
SK052	S-052	土坑	K-76	14世紀後半～15世紀初葉		60
SK053	S-053	土坑	K-75	14世紀後半		61
SK054	S-054	土坑	K-75・76	14世紀中葉～後半	礎上と礎を調査した土層	61
SK059	S-059	土坑	K-75	14世紀中葉	井戸の可能性。礎は未検出。	61
SK060	S-060	土坑	J-75	不明		65
SK061	S-061	土坑	J-75	14世紀代		65
SK063	S-063	土坑	K-75	14世紀後半		65
SK066	S-066	土坑	K-75	14世紀前半～中葉	在地系土加器を一括調査	65
SK071	S-071	土坑	J-75	14世紀代		66
SK072	S-072	土坑	K-75	14世紀代		67
SK074	S-074	土坑	K-74	15世紀中葉	礎を含む竃跡土坑	67
SK075	S-075	土坑	K-74	14世紀中葉	井戸の可能性あり	67
SK077	S-077	土坑	K-78	16世紀後半	床面から炭化材・炭層。鐵冶関連。	69
SK078	S-078	土坑	K-74	15世紀以降		70
SK079	S-079	土坑	J・K-78	14世紀中葉		70
SK083	S-083	土坑	K-78	不明	層平礫が多量出土	71
SK085	S-085	土坑	J・K-75・76	14世紀代		71
SK086	S-086	土坑	J・K-76	14世紀中葉	複数遺構の切り合い	71
SK087	S-087	土坑	K-75	14世紀代		76
SK090	S-090	土坑	K-77	16世紀後半	遺物が多量に出土	76
SK091	S-091	土坑	K-75	14世紀中葉	溝状遺構と同じ方向性	77
SK101	S-101	土坑	K-76	不明		78
SK102	S-102	土坑	K-74	14世紀代		79
SK109	S-109	土坑	J-74	14世紀中葉	ヘソ直他、遺物が多量に出土	79
SK111	S-111	土坑	J-78	14世紀代		89
SK114	S-114	土坑	K-76	不明		90
SK122	S-122	土坑	K-74	不明		90
SK123	S-123	土坑	K-74	14世紀代	井戸遺構の可能性あり	90
SK124	S-124	土坑	J・K-76	不明		91
SE126	S-126	井戸	K-77・78	14世紀代	結構様	127
SK127	S-127	土坑	J・K-77	16世紀後半	床面に炭化物の屑	91

第4表 主要遺構一覧表(2)

本書での遺構番号	調査時の遺構番号	遺構の種類	遺構の位置	遺構の時期	特記事項	掲載頁
SK128	S-128	土坑	K-76	16世紀初頭～前葉	炭化物を多く含む埋土	92
SK129	S-129	土坑	K-76	不明	炭化物を多く含む埋土	92
SK130	S-130	土坑	K-75	14世紀代		93
SK131	S-131	土坑	J-77	14世紀代	炭化物を多く含む埋土	93
SK133	S-133	土坑	K-77	14世紀代		94
SK134	S-134	土坑	K-77	14世紀代	人骨出土 土坑墓	94
SK136	S-136	土坑	K-76	不明	土坑墓の可能性が高い	94
SD137	S-137	溝		14世紀代	在地系土師器が多量出土	18
SK140	S-140	土坑	K-77	14世紀後葉		94
SK141	S-141	土坑	K-77	16世紀後葉	礫による埋め立て	95
SE142	S-142	井戸	K-77	16世紀以前	結構後	127
SK143	S-143	土坑	K-77	14世紀代		95
SK144	S-144	土坑	L-78	16世紀後葉	SK172を含む遺構 分割出土	96
SK145	S-145	土坑	L-76	不明		97
SK146	S-146	土坑	L-76	16世紀後葉	礫が多量に出土	97
SK150	S-150	土坑	K-75・76	16世紀後葉		103
SK154	S-154	土坑	L-77	14世紀代		103
SK155	S-155	土坑	L-77	14世紀初頭～前葉	吉備系土師器類、在地系土師器	106
SD156	S-156	溝		14世紀代	SD137と同じ遺構	27
SK158	S-158	土坑	L-75	14世紀代		108
SK164	S-164	土坑	K-75	14世紀代		109
SK169	S-169	土坑	L-76	16世紀後半?		109
SK170	S-170	土坑	K-75	不明		112
SK171	S-171	土坑	L-76	14世紀代	瀬戸・美濃のおろし肌	112
SK172	S-172	土坑	L-78	16世紀後葉	SK144の一部、鉄器-一括埋納	96
SK173	S-173	土坑	L-76	不明		112
SK180	S-180	土坑	L-77	不明		112
SK183	S-183	土坑	L-75	14世紀中葉		112
SK184	S-184	土坑	L-75	不明		112
SK187	S-187	土坑	L-78	不明		113
SK193	S-193	土坑	K-77	14世紀中葉	大型土坑 流入状態で遺物出土	113
SK195	S-195	土坑	K-76	14世紀代		117
SK196	S-196	土坑	K-76	14世紀代	奈良火鉢出土	117
SK197	S-197	土坑	K-76	14世紀後半		117
SK202	S-202	土坑	K-78	14世紀代	土坑墓の可能性	117
SK203	S-203	土坑	L-75・76	14世紀代		117
SK204	S-204	土坑	L-75・76	14世紀代	上面で礫が出土	117
SK206	S-206	土坑	L-75	14世紀代		119
SK207	S-207	石椁	L-76	16世紀後葉	人頭大の石積み 北面合わせ	131
SK216	S-216	土坑	K・L-76	14世紀代		119
SK220	S-220	土坑	K-75	14世紀代		119
SK224	S-224	土坑	K-75	14世紀代		119
SK226	S-226	土坑	K-75	14世紀代		119
SK227	S-227	土坑	K-75	不明		121
SK230	S-230	土坑	K-76	14世紀代		121
SK231	S-231	土坑	K-76	16世紀後葉		121
SK233	S-233	土坑	L-75	14世紀代	2基以上の遺構の切合い	121
SK234	S-234	土坑	K-75	14世紀中葉		122
SK240	S-240	土坑	K・L-76	14世紀中葉		123
SK244	S-244	土坑	K-75	不明		123
SK248	S-248	土坑	L-77	16世紀後葉		124
SP1008	S-1008	柱穴状遺構	J-74	14世紀代		136
SP1017	S-1017	柱穴状遺構	J-74			136
SP1039	S-1039	柱穴状遺構	K-74		土樋	136
SP1065	S-1065	柱穴状遺構	K-76		鍍金青銅製金具	136
SP1083	S-1083	柱穴状遺構	J・K-74			136
SP1091	S-1091	柱穴状遺構	K-74		銅銭	136
SP1133	S-1133	柱穴状遺構	K-75		銅銭	136
SP1135	S-1135	柱穴状遺構	K-75		銅銭	136

第1節 調査の概要

第5表 主要遺構一覧表(3)

本舎での遺構番号	調査時の遺構番号	遺構の種類	遺構の位置	遺構の時期	発見事項	掲載頁
SP1147	S-1147	柱穴状遺構	K-74			139
SP1151	S-1151	柱穴状遺構	K-74			139
SP1155	S-1155	柱穴状遺構	K-76	14世紀代	銅銭	139
SP1164	S-1164	柱穴状遺構	K-76			139
SP1165	S-1165	柱穴状遺構	K-76		銅銭	139
SP1167	S-1167	柱穴状遺構	K-76		銅銭	139
SP1219	S-1219	柱穴状遺構	K-75		硝石	139
SP1244	S-1244	柱穴状遺構	K-75		銅銭	139
SP1258	S-1258	柱穴状遺構	K-75		鉄釘	139
SP1259	S-1259	柱穴状遺構	K-75		銅銭	139
SP1295	S-1295	柱穴状遺構	K-75		滑石製石鎮	139
SP1306	S-1306	柱穴状遺構	K-76		鉄釘	139
SP1312	S-1312	柱穴状遺構	J-78	14世紀代		139
SP1322	S-1322	柱穴状遺構	K-78			139
SP1336	S-1336	柱穴状遺構	J-77	14世紀代	瓦質土器の火鉢	139
SP1340	S-1340	柱穴状遺構	J-78	14世紀代		139
SP1356	S-1356	柱穴状遺構	K-76			139
SP1357	S-1357	柱穴状遺構	K-75		鉄釘	139
SP1358	S-1358	柱穴状遺構	J-76		硝石	139
SP1369	S-1369	柱穴状遺構	K-74		石製品	139
SP1379	S-1379	柱穴状遺構	J-76			139
SP1382	S-1382	柱穴状遺構	K-76			139
SP1384	S-1384	柱穴状遺構	J-77		ガラス壺	139
SP1399	S-1399	柱穴状遺構	K-75		滑石製石鎮	139
SP1400	S-1400	柱穴状遺構	K-75		銅銭	139
SP1401	S-1401	柱穴状遺構	K-75		銅銭	139
SP1430	S-1430	柱穴状遺構	K-76		鉄釘	141
SP1452	S-1452	柱穴状遺構	K-76	14世紀代		141
SP1458	S-1458	柱穴状遺構	L-77		鉄釘	141
SP1463	S-1463	柱穴状遺構	L-77	15世紀代	備前産鉄	141
SP1464	S-1464	柱穴状遺構	L-77		鉄釘	141
SP1466	S-1466	柱穴状遺構	L-77			141
SP1470	S-1470	柱穴状遺構	L-77		土鎮	141
SP1473	S-1473	柱穴状遺構	K-77		銅銭	141
SP1474	S-1474	柱穴状遺構	K-77	14世紀代		141
SP1478	S-1478	柱穴状遺構	L-77	14世紀代		141
SP1482	S-1482	柱穴状遺構	K-77		土鎮	141
SP1492	S-1492	柱穴状遺構	K-77		土鎮	141
SP1497	S-1497	柱穴状遺構	L-77		籠(カスガイ)	136
SP1506	S-1506	柱穴状遺構	L-77			136
SP1513	S-1513	柱穴状遺構	K-75		鉄釘	141
SP1522	S-1522	柱穴状遺構	K-74	14世紀代		141
SP1536	S-1536	柱穴状遺構	L-77		滑石製石鎮	141
SP1542	S-1542	柱穴状遺構	L-76			141
SP1552	S-1552	柱穴状遺構	K-76		銅銭	141
SP1553	S-1553	柱穴状遺構	K-76		銅銭	141
SP1560	S-1560	柱穴状遺構	L-75		銅銭	141
SP1592	S-1592	柱穴状遺構	K-75		銅銭	141
SP1597	S-1597	柱穴状遺構	K-77		銅銭	141
SP1599	S-1599	柱穴状遺構	K-77		銅銭	141
SP1608	S-1608	柱穴状遺構	K-76		銅銭	141
SP1613	S-1613	柱穴状遺構	K-75		銅銭	141
SP1635	S-1635	柱穴状遺構	K-75		鉄釘	141
SP1663	S-1663	柱穴状遺構	K-74			141
SP1670	S-1670	柱穴状遺構	K-76		銅銭	141
SP1679	S-1679	柱穴状遺構	L-77		鉄釘	141
SP1709	S-1709	柱穴状遺構	L-75	14世紀代		141
SP1752	S-1752	柱穴状遺構	K-78	14世紀代		141
SP1759	S-1759	柱穴状遺構	K-78		硝石	141



16世紀後半の遺構

第5図 府内町跡30次調査遺構配置図

第2節 遺構と遺物

1. 溝

溝状遺構は、調査区中央南寄りの、ほぼ同じ位置で数条、確認されている。その方向もN-70-Eで近似しており、規模・規格も類似し、同じ目的で掘削された可能性が強く、前後関係もあると考えられる。しかし、発掘調査時にそれを確認することは、出来なかった。すなわち、遺構名は検出順に付けているが、新旧を表すものではない。

SD051

第6図に図示したSD051は重なり合う溝群の中でも、一番北側に位置する。遺構は、調査区を東西方向に約16.6mの規模で検出され、さらに両側に延びていることが確認できる。遺構の状況を、床面の検出状態から見ると、東側の2/3は断面がW字状になり、西側はU字状である。このことから、SD051は複数の同じ方向の溝が重なっていることがわかる。

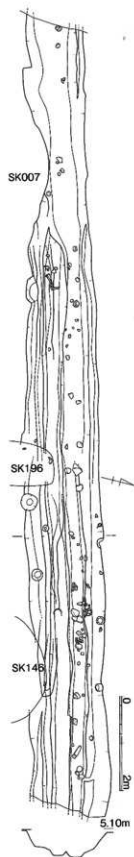
全体の溝の規模は、複数の重なりが観察出来る部分は、幅約1.6m、深さ約0.4mで、床面の平坦部は狭く細長い。西側の幅は、約1.2mで、深さはほぼ同じで約0.4mで、床面は幅広で、平坦である。

遺構内から出土した遺物は、第7・8図に図示した。第7図1は、龍泉窯系の青磁碗である。2・4・6は、須恵質土器で、2・4は、外面全体を格子叩きで鬼面調整しており、口縁部はさらに横撫で、仕上げられている。2点は同一個体の可能性が高い。3は土師質土器の甕である。内面には、鋭い先端による横方向の刷毛目が観察できる。5は瓦質土器の鍋で、口縁部外面が肥厚し、内面は横、外面は縦方向の刷毛目調整があるが、外面は雑で、指圧痕が残り、煤が付着する。6は、口縁端部が肥厚し、立ちあがる東播系の鉢である。

7は高台の付く須恵器の坏である。8は古代の坏の可能性もあるが、底部が磨滅し、器面調整の方法は不明である。

9-15は在地系土師質土器小皿である。平均口径は、8.2cm、平均底径6.8cmで、口縁部は短く摘み出し、形成し、平均器高は1.2cmである。

第7図16・17と第8図1-9は坏である。底部には糸切り痕が残り、口縁部を斜めに立ち上げるため、側面観が逆台形になる。口縁部の断面は器壁の厚さが比較的均一な第8図1・2がある一方、第9図7、第9図



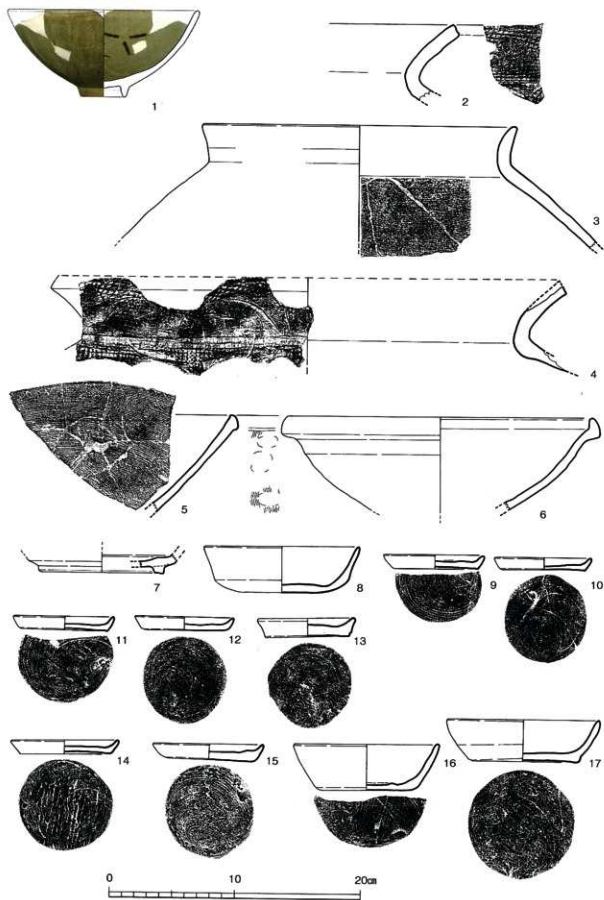
第6図 SD051実測図

龍泉窯系

土師質土器

瓦質土器

第2節 遺構と遺物

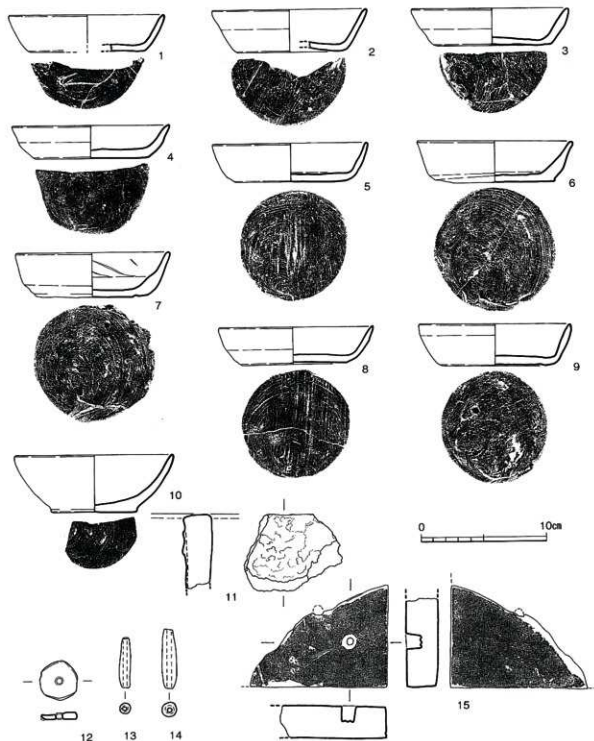


第7図 SD051出土遺物実測図① (1/3)

3・8・9は口縁部の中位が厚い。また、4・6・7は底部近くが厚く、口縁端部にかけて尖るように薄くなる。5・8の底部には板目圧痕が付く。

以上の坯は口径・底径・器高の平均法量は、12.3cm、8.8cm、3.2cmであるが、第8図10は口径が12.2cm、底径6.8cmと小さく、器高は4.5cmと高い。このため、形態は碗形になる。

第8図11は埴壇の破片であり、厚い器壁の内面に青銅滓が付着している。12は土器片を利用した45gの紡錘車で、13・14は紡錘形をした漁網錘で、それぞれ29g、6.4gある。15は瓦質で板状の



第8図 SD051出土遺物実測図② (1/3)

焼き物である。器面には、焼成前の未貫通の孔と、貫通した孔が認められる。

遺構は、先に述べたように、複数の掘削が認められる。このため、時期幅があることも想定できるが、土師質土器の形態から、14世紀後半と想定する。

SD137

第9図に図示したSD137は溝群の中でも南端で検出された遺構である。他の遺構と切り合うため、長さ約10mを確認したのみで、本来はさらに東西方向に延びると想定できる。遺構の規模は、幅約1.5mであるが、底面形態や断面を見ると、南側が約0.7m幅で、検出面から約0.5mで一段浅い。また、南側は、幅0.6m、深さ約1mの規模で一段深く、底の幅は約0.2mで規則性が強い。

遺物は、この南側の一段深い溝の上部に廃棄された状態で、集中的に出土した。そのほとんどは在地系土師質土器の坏で、一括廃棄の状態であった。この土師質土器の出土状況や遺構の断面形態から想定すると、SD137は、第10～18図に図示したのが、この遺構から出土した遺物である。第10図1は龍泉窯系青磁碗である。

2は口縁部形態から常滑焼の甕と考える。3は口縁部が短く屈曲した土鍋である。内面は横方向の刷毛目で器面調整されている。4は備前焼の甕で、外面は平滑に撫でられているが、指圧痕が残る。5・6は瓦質土器の鉢で、内面には横方向の刷毛目調整が認められる。

7は吉備系土師器である。色調は白色系で、口径は10.4cm、器高3.5cm、底径3.0cmで、高台は退化している。

8～15は在地系土師質土器の皿である。口縁部の断面形態は、平均底径7.0cmの底部から口縁部を積み出し形成しており、その器高は平均で1.3cmである。口径は平均8.4cm前後であるが、底部の厚さの個体差が大きい。

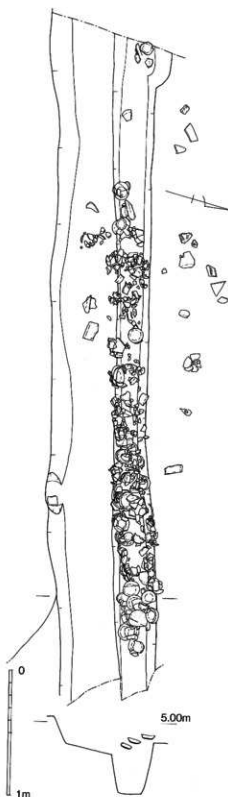
第10図16～18と第11～18図は在地系土師質土器の坏である。図示した坏の内、半数以上の口縁部の法量は口径が12.5cm前後であるが、器高は3.0cm前後と3.5cm前後、4.4cm前後の3グループに分かれる。底径は、9.0～10.0cmが大半を占めるが、7.0cm程度のももある。

こうした、口径、底径、器高の組合せの中で、坏を見ると、第13図の11・12の口径は他と同じであるが、底径が7.0cm前後で小さく、器高が4.4cm前後で高く、口縁部は外反し、他の坏と器形が異なる。

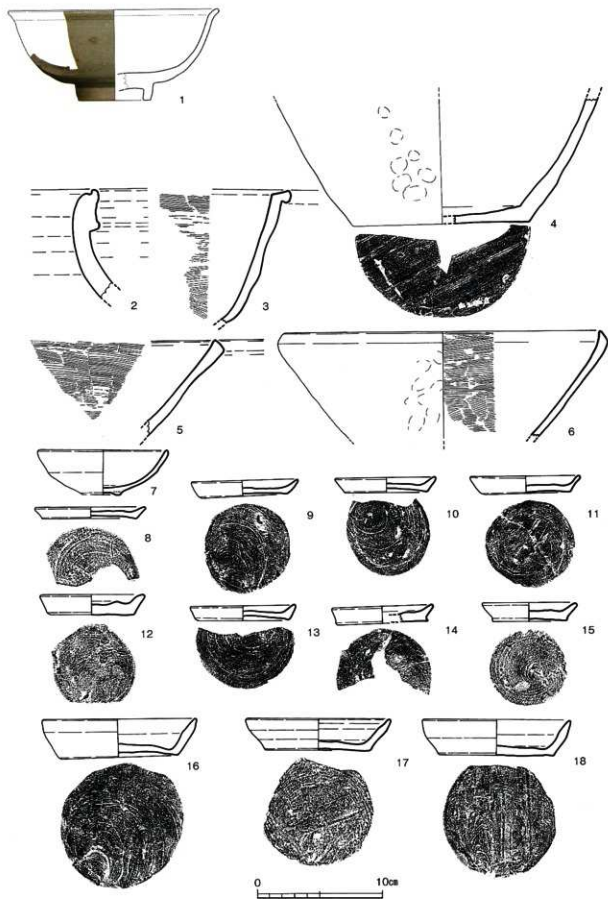
また、残りの坏の平均器高は3.2cmであるものの、その分布を見ると、3.1cm前後（第10図16・17、第11図1～3・6・10・12～15、第12図1・2・7・10、第13図3・7・10・13、第14図1・6・9・10・15、第15図2・3・5・

龍泉窯系青磁碗

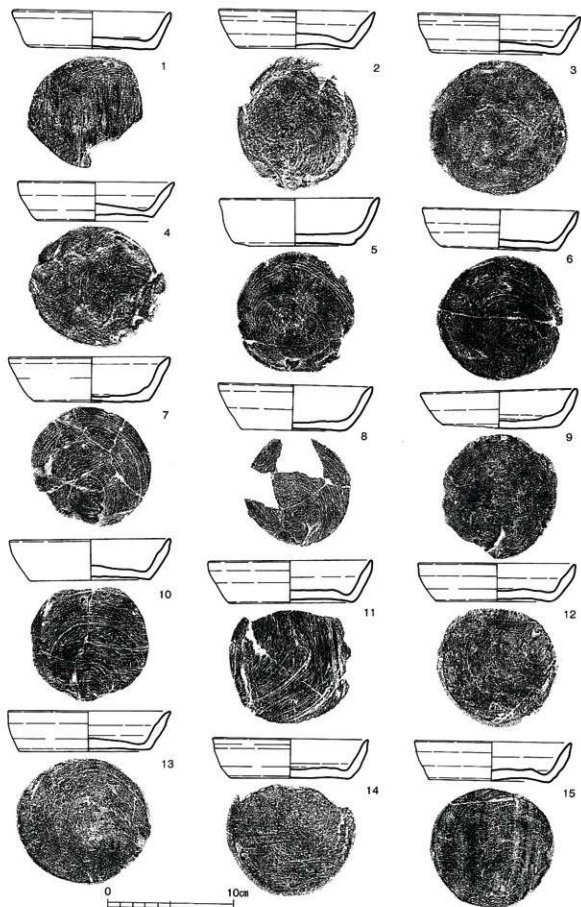
吉備系土師器



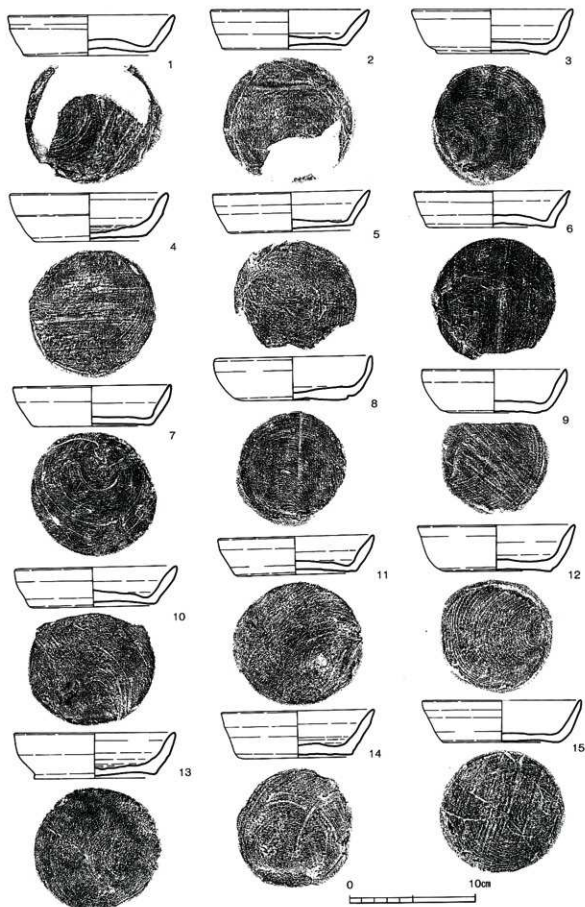
第9図 SD137実測図 (1/30)



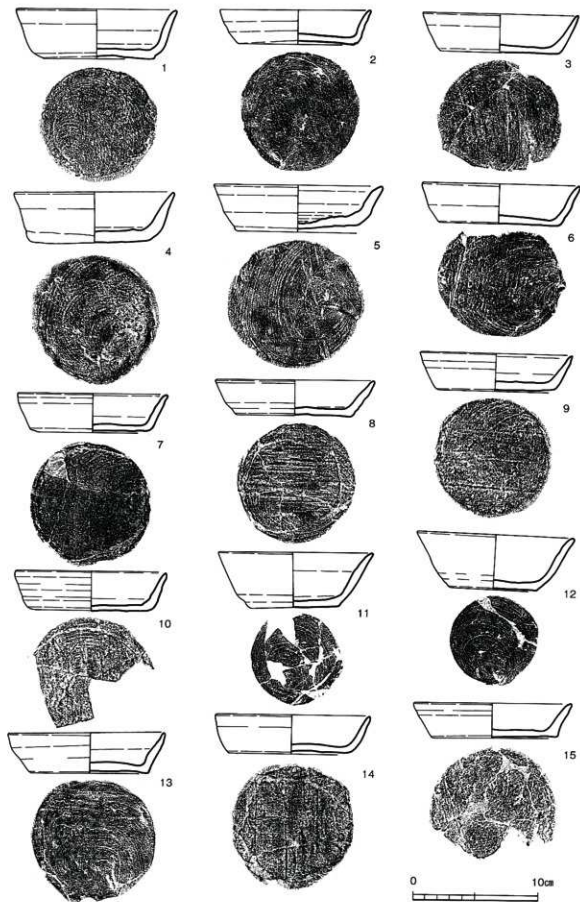
第10図 SD137出土遺物実測図① (1/3)



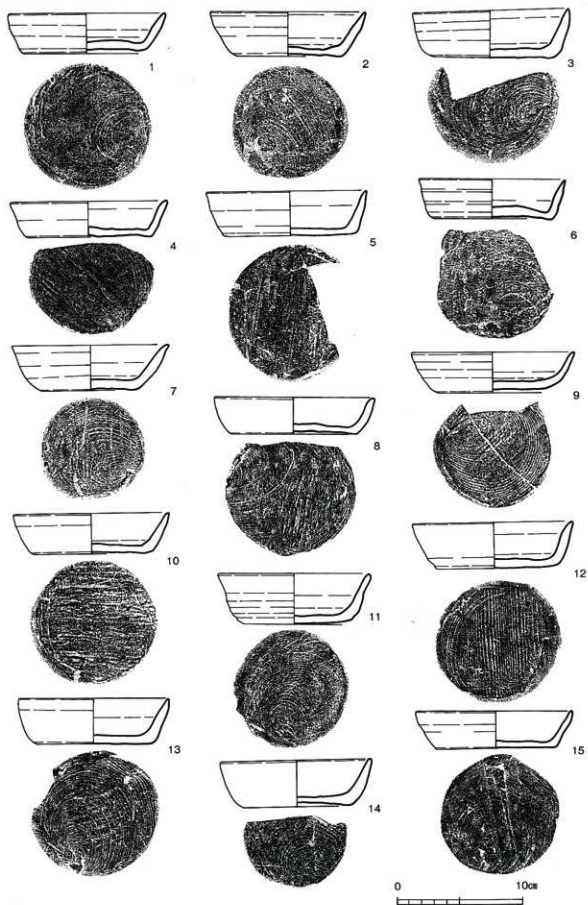
第11図 SD137出土遺物実測図② (1/3)



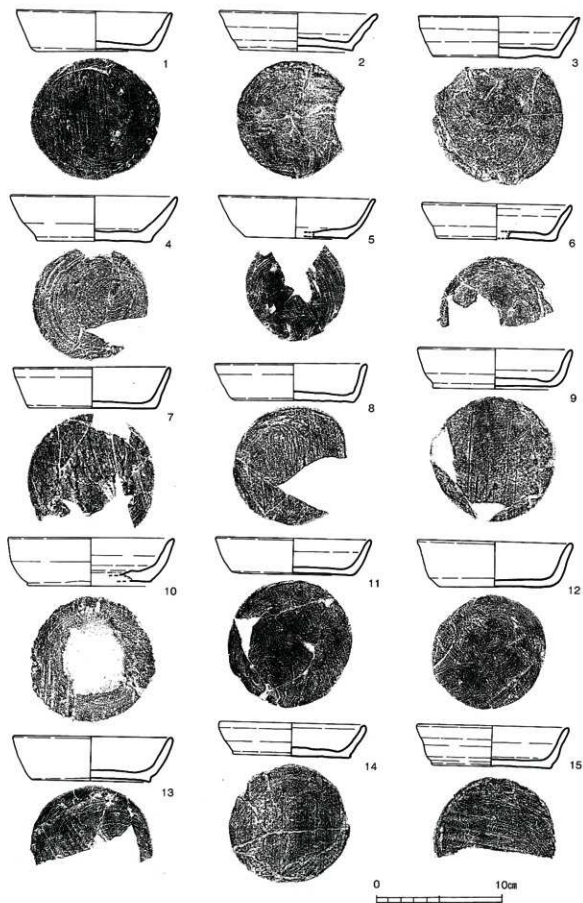
第12図 SD137出土遺物実測図③ (1/3)



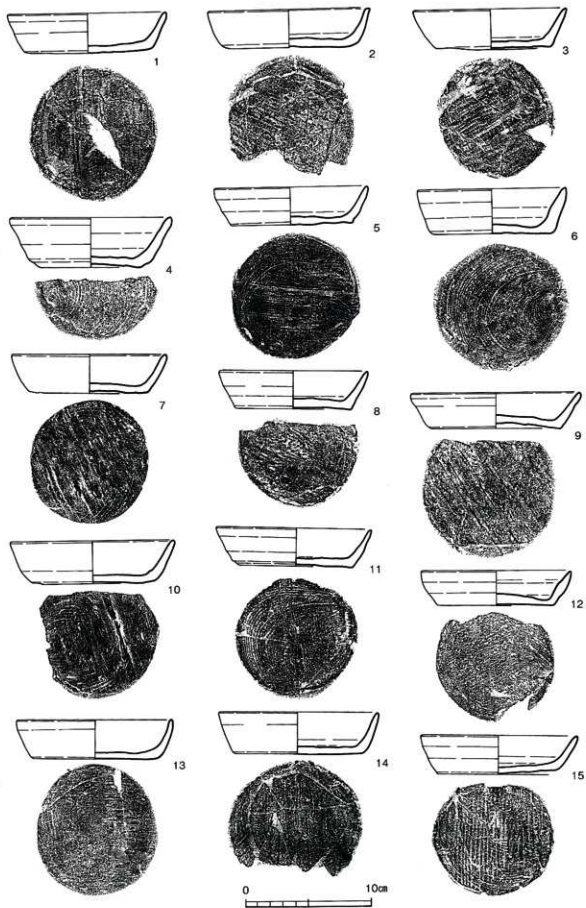
第13図 SD137出土遺物実測図④ (1/3)



第14図 SD137出土遺物実測図⑤ (1/3)



第15図 SD137出土遺物実測図⑥ (1/3)



第16図 SD137出土遺物実測図⑦ (1/3)

8・9・15、第1～3・5・7・8・11・13・14、第17図3)と3.5cm前後(第11図7・8、第12図3・4・12～14、第13図5、第14図2・3・5・7・12・13、第15図4・10・13、第16図6)に分かれる。

しかしこうした器高さに関係なく、口縁部の断面形態は、底部近くの器壁が薄く、中位で厚くなる紡錘形をしているもの(第10図16～18、第11図2～13・15、第12図1・2・5～7・9～12、第14図1、第15図3、第16図12。)と、底部近くの器壁が厚く、先端にかけて、尖るように薄くなるもの(第11図1・14、第12図3・4・13～15、第13図1～10・13～15、第14図2～15、第15図1・2・4～15、第16図1～11・13～15、第18図1～3)のように、両者が混同している。

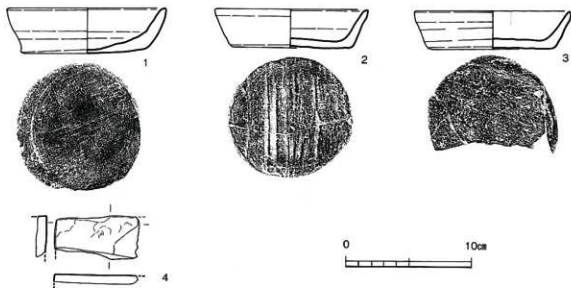
さらに、口縁端部の形態は、第12図8、第16図13のように内湾気味になるもと、第13図1・2・4・6、第14図7のように外反するものがある。

第17図4は砥石の破片である。

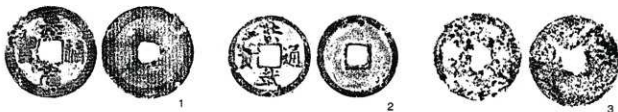
第18図は出土した銅銭である。1は北宋1034年初鑄の篆書体の「景祐元宝」である。2の「洪武通寶」は1368年初鑄の真書体の明銭である。3は鏽のため判読不能である。

洪武通寶

SD137から出土した、多量の土師質土器の坏は、出土状況から一括性の強い遺物群と言える。一部混入と考えられる遺物も存在するが、その時期は、退化した吉備系土師器を伴うことから、14世紀初頭を上限と考えることが出来る。しかし、多量に出土する在地系土師器の形態は、多様であり、時期差を含む可能性も考えられ「洪武通寶」も出土していることから、14世紀代と考える。



第17図 SD137出土遺物実測図⑧ (1/3)



第18図 SD137出土銅銭実測図 (1/1)

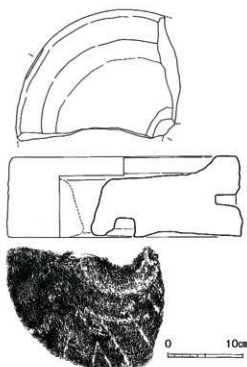
SD156

SD156はSD137の東の延長上で検出されたもので、第19図に図示した。溝状遺構の一部と考えられる。検出された遺構の規模は、長さ27mで、幅は東端が0.7m、西端が1.4mである。断面形は皿状で浅く、南側が深く検出面から約20cmである。

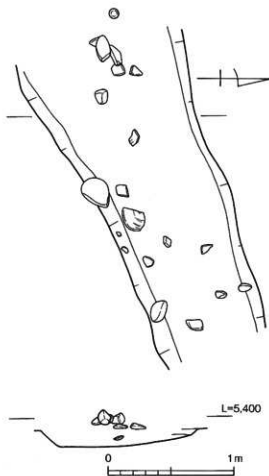
出土遺物は第20・21図に図示した。第21図1・2は龍泉窯系の青磁碗である。3・4は瓦質土器で、在形土師質土器 3は香炉の底部、4は外面に菊花文のスタンプ文がある鉢と考える。5は口径8.7cmの在形土師質土器の皿である。6は底部に焼成前の穿孔がある。

挽臼 第21図は直径31cmの挽臼の上臼である。

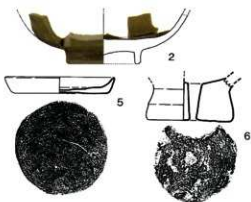
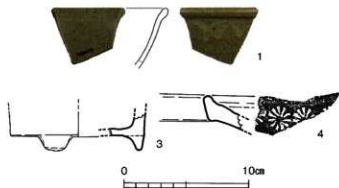
時期は14世紀代と考える。



第21図 SD156出土遺物実測図② (1/5)



第19図 SD156実測図 (1/30)



第20図 SD156出土遺物実測図① (1/3)

2. 土坑

中世大友府内町跡第30次調査区から検出された遺構は約1000遺構ある。その95%以上が大小の土坑で、小さいものは直径20cm前後、大きいものは直径4mにのぼる。このうち、目的の明確なものは、井戸や廃棄土坑などがあるが、他の多くは柱穴の可能性を含み、性格の不明なものばかりである。ここでは、比較的大型の掘り込みで、遺物がまとまって出土したものを、土坑として報告を行う。

SK002

SK002は調査区の中央北寄りのK-75区で検出された遺構で、ほぼ同じ位置で検出された南北約9.5m、東西約4.5mの南北に長い楕円形のSK001の北半分に掘り込まれているのが、床面で検出された。遺構の規模は東西約3.5m、南北約5.0mの円形をしており、断面は深さ20cmで皿状をしている。

龍泉窯系
備前焼
常滑焼

第22・23図は出土した遺物であるが、第23図1は、龍泉窯系の青磁碗である。2・3は瓦質の播鉢であるが、2の播目は1条で、横方向の刷毛目が入る。4は、口径30.2cmの備前焼の播鉢で、斜め播目は認められない。5は口径36cmの常滑焼の甕である。6～8は在地系土師器であるが、3点とも器形が異なる。6は口径8.4cm、底径6cm、器高1.7cmで、皿形であるが、8は、口径11.2cm、底径8.3cm、器高3.1cmの坏形である。7はその中間形態で、口径7cm、底径5cmであるが、器高は2.5cmである。

銅銭

9は内面にヘラ削りの後があり、古墳時代の土師器の壺である。10は直径3cm、厚さ1.2cmの紡輪車で、焼成前の穿孔があり、重さは5.9gである。11は砥石の破片である。12は軒丸瓦で、文様は、珠文と巴文で構成されている。第22図は銅銭であるが、1は北宋の1004年初鑄の「景德元寶」で、重さ2.1g、直径2.5cmである。2は北宋の1056年初鑄の「嘉祐通寶」で、重さ3.0g、直径2.3cmである。3は北宋の1023年初鑄の「天聖元寶」で重さ2.1g、直径2.4cmである。4は北宋の1068年初鑄の「熙寧元寶」で、重さ2.9g、直径2.4cmである。5は保存状況が悪いため、判読不明である。

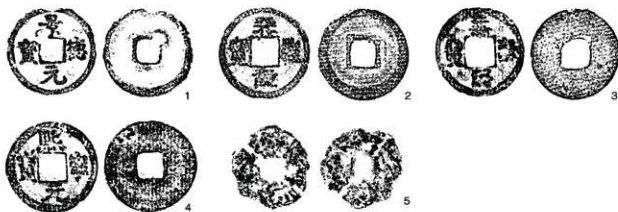
時期は、上面に16世紀後半のSK001が乗ることや、出土遺物の備前焼の形態から16世紀前半と考える。

SK003

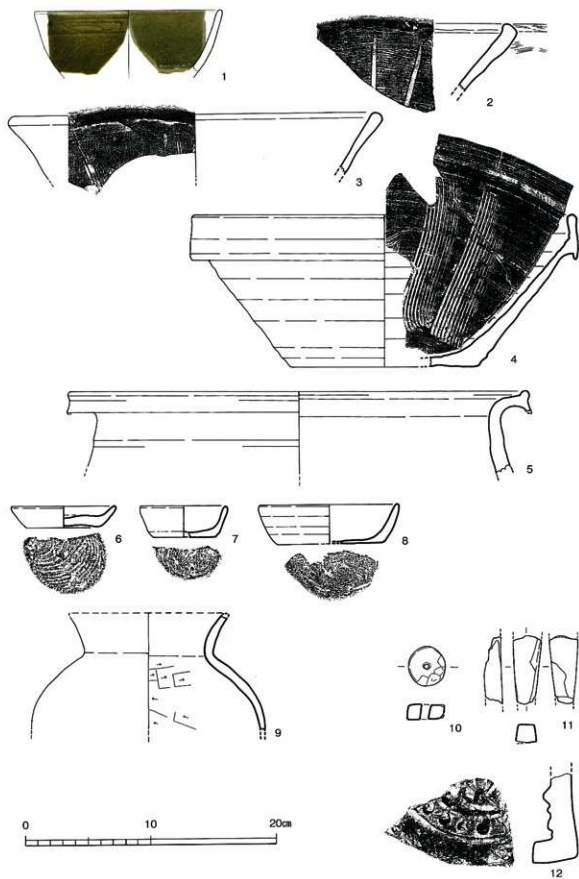
第24図に図示したSK003は、調査区の南西隅で検出された遺構で、SK019を切り掘り込まれている。遺構の規模は、東西約1.8m、南北約1.7m、深さ約40cmで、断面形は深い皿状をし、底径は約50cmである。遺構内からは流れ込んだ状態で、焼土・炭と礫を主体とした遺物が出土し、自然に埋没した状況である。

備前焼

出土遺物は、第25図に図示したが、1は備前焼の壺で、肩に耳が付いた痕跡が認められる。2は口径10.6cm、器高2.3cmの京都系土師器である。3は底部の厚さが1.6cmあるが、中央部に焼成前の穿孔



第22図 SK002出土銅銭実測図 (1/1)



第23図 SK002出土遺物実測図 (1/3)

第2節 遺構と遺物

があり、燭台と考えられる。

4は、直径1cmの紡錘形の土鍾であるが、半分に折れている。5は1面のみ使用された砥石である。6は刀子で、長さは7.6cm残されており、身幅は0.7cmである。

遺構の時期は、2のほぼ完形品の京都系土師器から、16世紀後葉と考える。

SK007

第26図に図示したSK007は前項で報告した、調査区の南寄りで検出された14世紀代の濶群を断ち切るように掘り込んだ土坑である。土坑の規模は、東西・南北とも約2.1mで、深さは約60cmである。床面の規模は径約1mで、傾斜は緩やかである。

遺構の中心部には南北方向に人頭大の礫で構築された石列が並び、その東側を中心に、拳大前後の礫が充填されており、この上面に石列による区画施設があった名残と考える。

遺構内からは第27～37図に図示しているように、多様な遺物が多く出土している。第27図は貿易

龍泉窯系

陶磁器である。1～6は龍泉窯系の青磁で、1～4は碗、5・6は皿で、6の底部は豊付きまで袖がつくが、見込みは露胎である。

白磁

7～11は白磁の皿で、9・11は同一個体の可能性が強い。12・13は青花の瓶の底部と考える。14～17

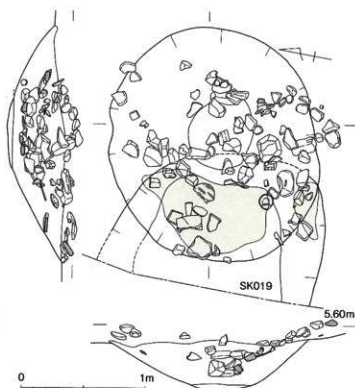
景德鎮窯系

の青花は景德鎮窯系で、底部には14に「福」、15には「大明年造」の銘が書かれている。16・17は見込みの文様が同じであり、組になるものと考えられる。18は漳州窯系の荖筒底の皿である。19は龍泉窯系の香炉である。

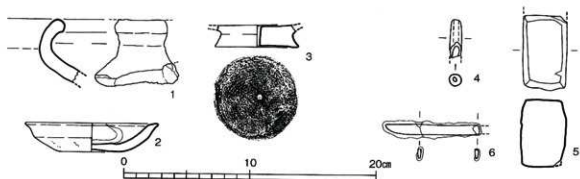
漳州窯系

タイ産四耳壺

第28図1はタイ産の四耳壺の頸部である。2は



第24図 SK003・019実測図 (1/30)



第25図 SK003出土遺物実測図 (1/3)

備前焼
褐袖陶器の四耳壺であるが、耳の方向が異なるものがある。3・5は焼締陶器の底部である。4・6～12は備前焼である。4は徳利の底部と考える。6は壺の口縁部、7は掛花入れ、8・9は壺の底部と考える。10は肩部に波状文がある壺で、11も壺の底部と考える。12は斜摺り目の入る摺鉢である。備前焼の摺鉢はこの他、第29図、第30図1・2に図示した。これらの摺鉢の形態は、第29図の1～5は底部から口縁部にかけて放射状に摺目に加えられている。また口縁部の形態も1・2は未発達である。これに対し、第29図6・第30図1・2は底部からの放射状の摺り目に、斜め方向の摺り目に加えられている。さらに口縁部の画面には凹線が走り、口唇部内面が凹線状にくぼむ。

水屋壺
第30図4～8、第31図1～4は備前焼の水屋壺である。4・5の口縁部の形態は異なるが、器形は肩部が張り、胴部に断面三角形の突帯が廻る。この突帯には、第31図2のように、円形の貼付文が付く。また、3の胴部には3ヶ所に指押さえによる刻み目がある粘土帯が付く。4は水屋壺の底部と考える。

第31図5～10は備前焼の壺の破片である。9の口縁部以外は底部である。9の口径は53.6cmある。底部の大きさは様々で、7が径12cm、6が径21cm、5が径25.2cm、8が径30cmで、最大は10で径45.4cmある。10は二石壺の底部の可能性が高い。

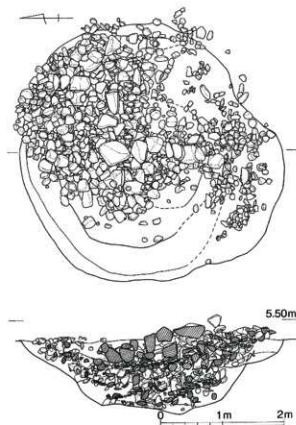
第32図1～10は土師質土器で、1～7は京都系土師器である。1・2・4は口径が8cm代で、最小のタイプである。3・5は口径が10cm台、6は12cm台である。7は口径が11.6cmであるが、器高が3.6cmあり、碗形をしている。これらの京都系土師器のうち、1は外面に、2～4の内面にはススが付着しており、灯明皿として使用された可能性を暗示している。8～10は糸切痕の底部を持つ土師質土器である。8の内面にはススが付着している。

11・12は土鍋であり、13は幅広に作成した口縁部に焼成前の穿孔がある内耳土器と考える。

第32図14～18、第33図1～3は瓦器である。14は口径30cmの鉢であるが、15・16は肥厚した口縁部外面に雷文のスタンプを連続的に加えた火鉢である。16の口径は36cmである。17は口径8.4cmの長頸壺であるが外面に同様な雷文が五段に渡り施文されている。18は口径34.6cmの風炉である。第33図1～3は火鉢の底部と考える。3には脚が3ヶ所認められる。

燭台
4～10は土製品である。1は上面径7cmの燭台である。5～9は紡錘形の土錘である。長さは4cm代であるが、重さは5の35gから7の152gまでである。10は土器片を円形に加工している。直径約4.6cmで、重さは17.1gである。11は弥生時代後期の複合口演壺である。12は高坏で、古墳時代と考える。13・14は砥石の破片である。14の面には粗い条痕が残る。15～18は鉄器である。15・16は鉄釘で、17は三つ又状になるフォーク形の鉄器である。18は五徳と考えられる鉄製品である。

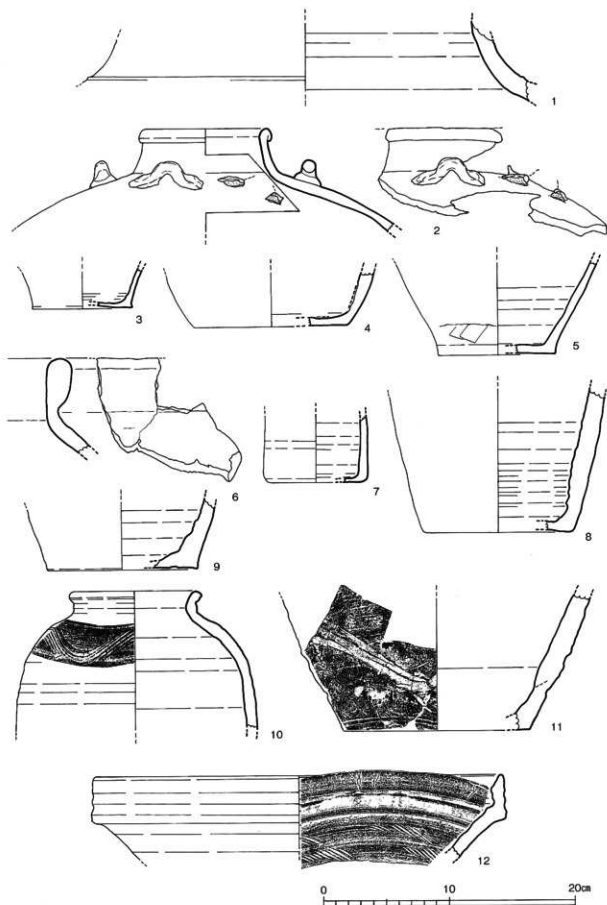
五徳



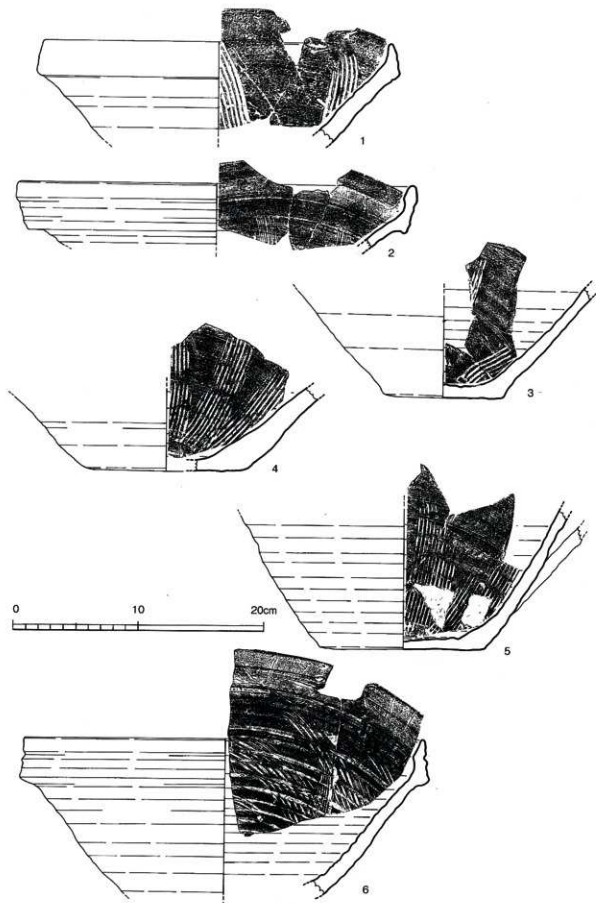
第26図 SK007実測図 (1/60)



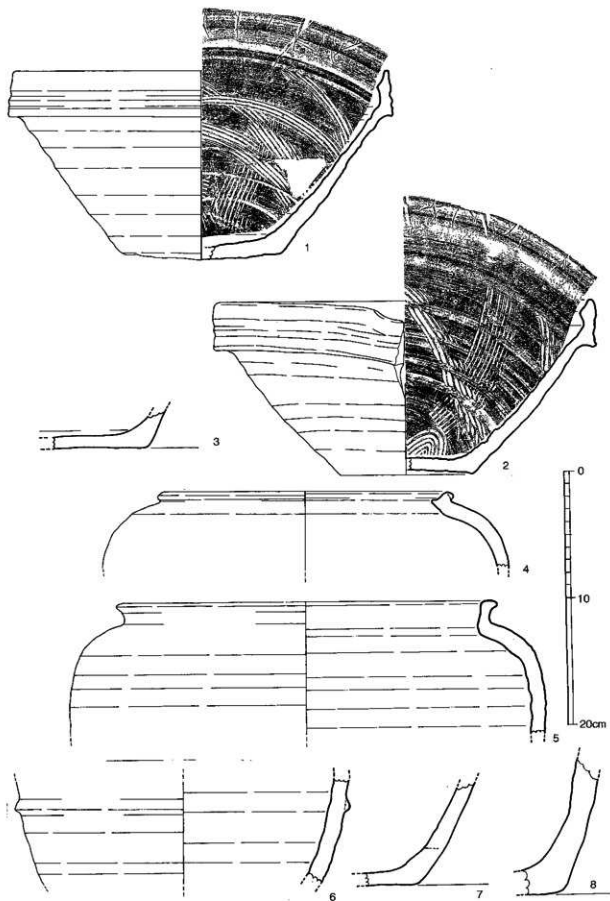
第27図 SK007出土遺物実測図① (1/3)



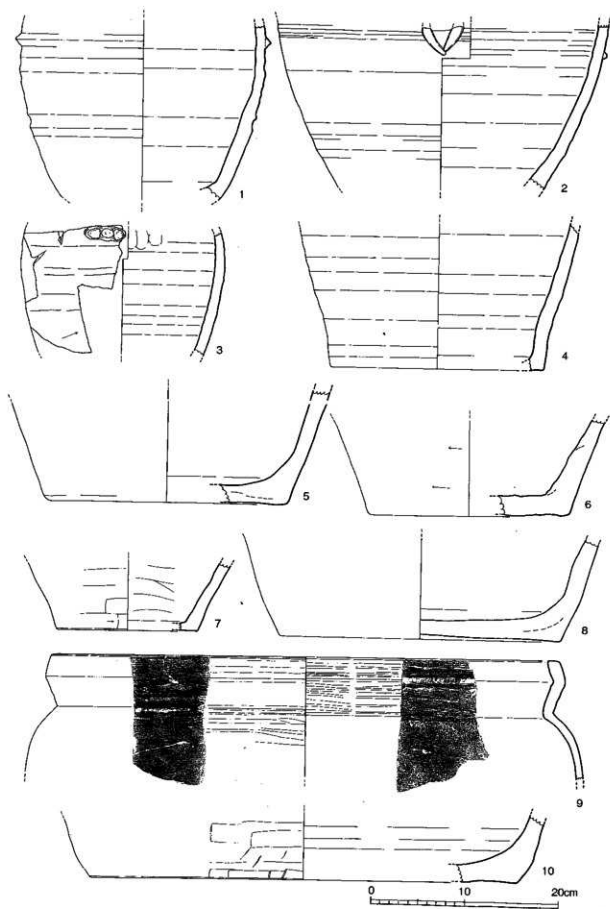
第28図 SK007出土遺物実測図② (1/3)



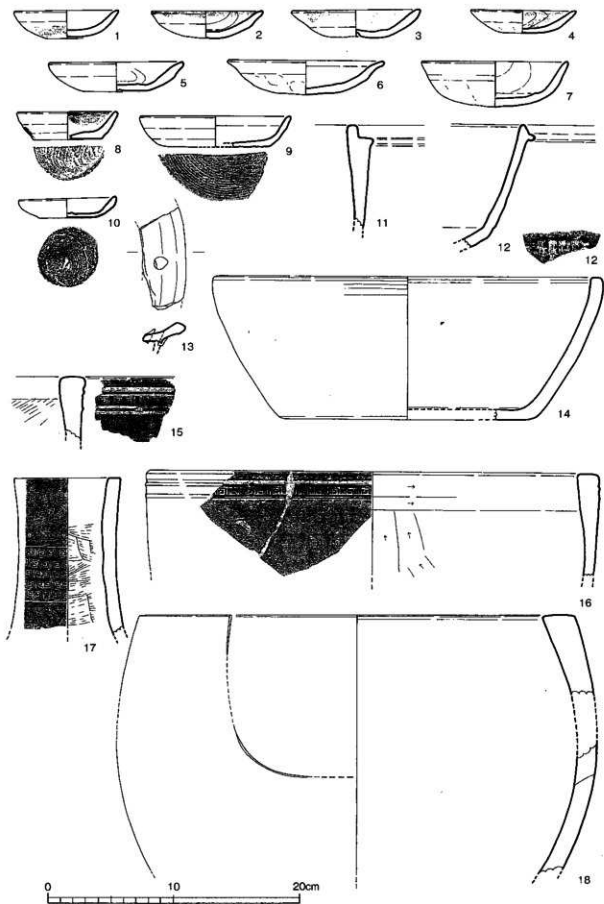
第29図 SK007出土遺物実測図③ (1/3)



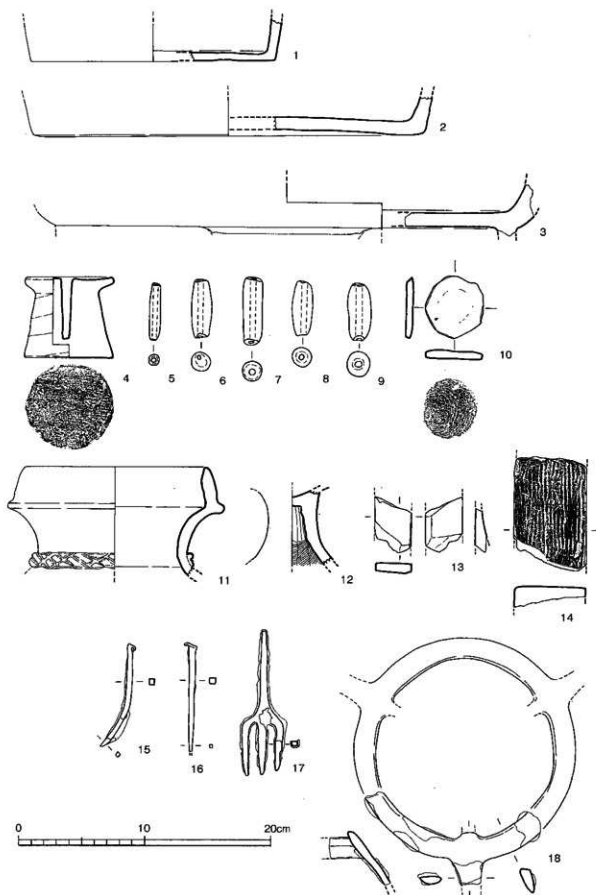
第30図 SK007出土遺物実測図④ (1/3)



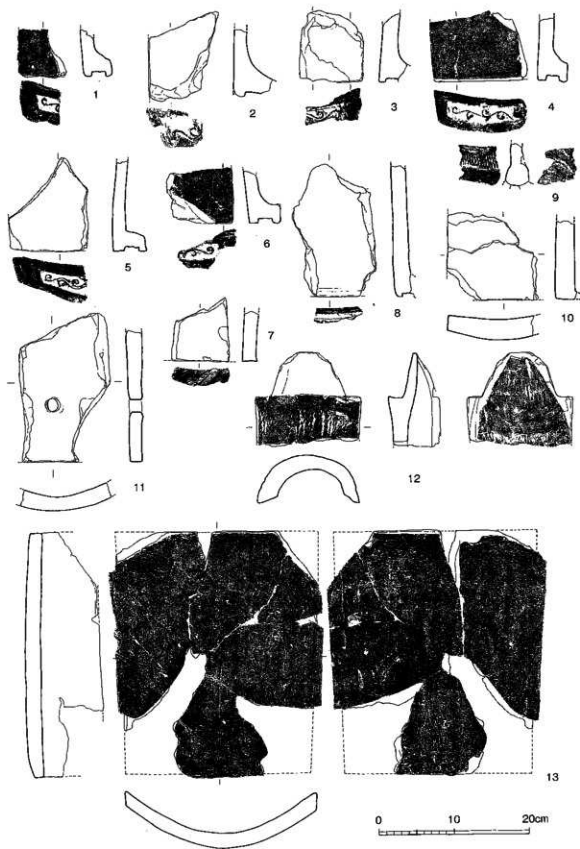
第31図 SK007出土遺物実測図⑤ (1/4)



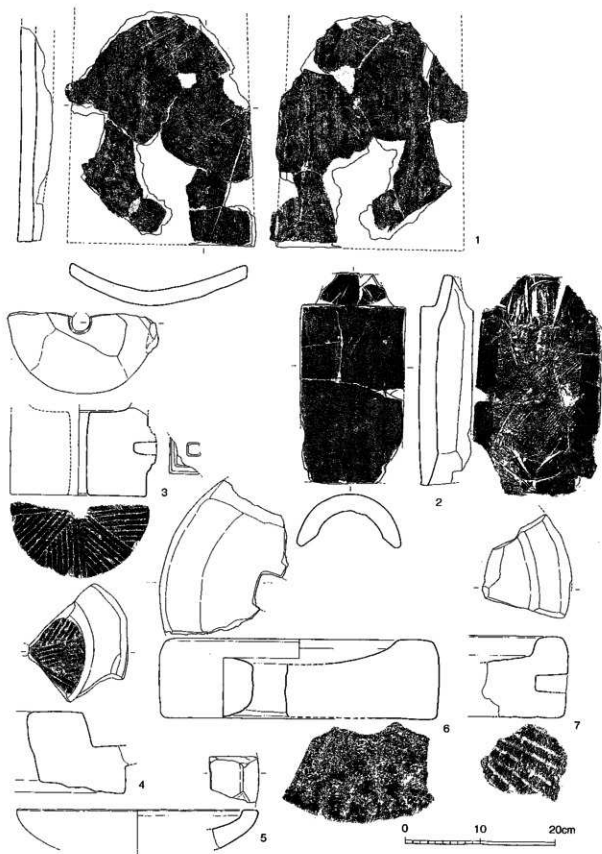
第32図 SK007出土遺物実測図⑥ (1/3)



第33図 SK007出土遺物実測図① (1/3)



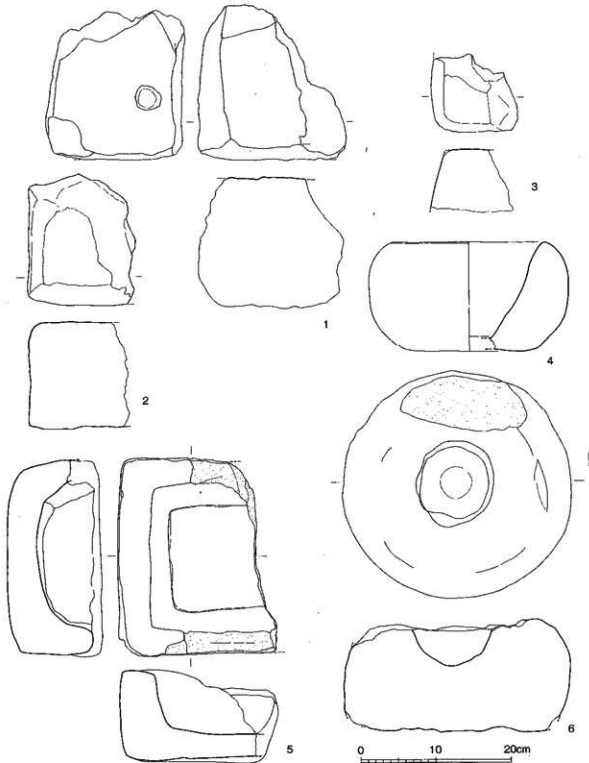
第34図 SK007出土遺物実測図⑥ (1/5)



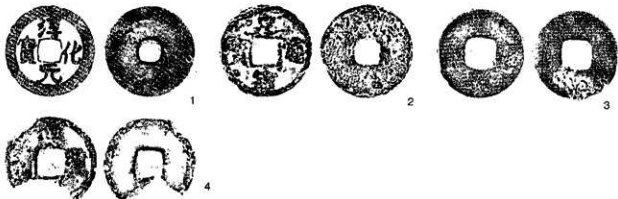
第35図 SK007出土遺物実測図⑨ (1/5)

軒平瓦

第34図・第35図1・2は瓦である。第34図1～8は軒平瓦で、唐草文を見ることが出来る。9は瓦当部分の粘土を貼り付けるため、接合部に縄目を付けている。11には釘穴がある。12は玉縁のある丸瓦である。13は接合資料であるが長さ32.5cm、幅25.6cm、厚さ2cmである。第35図1の幅は23.8cmである。2は丸瓦で、長さは27.9cm、幅13.9cm、厚さ約2.3cmである。



第36図 SK007出土遺物実測図⑩ (1/5)



第37図 SK007出土銅銭実測図(1/1)

茶臼
和泉砂岩

第35図3～7は、挽き臼である。3は底径18.2cmの上臼で、挽き手を挿入する孔には方形の台座が付き、播り面は8区画8線である。4・5は下臼で、5は受けの部分である。これらは茶臼と考えられ石質は肌理の細かい砂岩で、和泉砂岩の可能性がある。これに対し、6・7の上臼は安山岩製で大型であり、6の上面径は35.2cmである。

阿蘇凝灰岩製

第36図に図示した石製品は阿蘇凝灰岩製である。加工痕のあるものを掲載したが、4は容器状に中を削り貫いている。また、5は方形に形状を整え、中を削り貫いている。

第37図は出土した銅銭である。1は北宋の990年初鑄の「淳化元寶」、1・3は北宋の1038年初鑄の「皇宋通寶」であるが、4は判読不能である。

SK007の時期は、京都系土師器がまとまって出土することや、備前焼の楯鉢の形態、貿易陶磁器の組合せなどから、16世紀後半と考える。

SK008

埋納

SK008は、調査区の南西部J・K-77で検出された土坑である。第38図に図示したように、規模は南北50cm、東西70cmの楕円形で、断面は皿状で、深さは最深部で13cmと浅く、底面は南北40cm、東西45cmの楕円形となっている。遺構の規模は小さいが、内部からは、鉄器がまとまって出土し、埋納した状態であった。

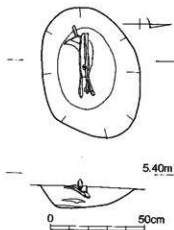
鎌

その遺物は第39図に図示した。出土した鉄器は7点で、1・2の鎌は、大きさが若干異なるものの同じタイプの鎌である。刃部は柄と平行せず捻れており、柄の部分の木を締めるための鉄輪がある。また、茎部の先端は柄抜けを防止するため曲げられている。

3は長さ32cmの鉄棒で、断面は約0.5cmの方形で、先端になるに従い、細くなる。上面を叩いて平たく団扇状にし、折り曲げて打面を造り出しており、釘と考える。4も同様に長さ34cmあり、断面も方形で、先端になるに従い細くなる。打面を欠いているが、釘の可能性がある。

5は長さ37cm、太さ約0.3cmの方形の鉄棒が2本重なって出土した。二本とも先端にゆくに従い細くなり、尖る。また、逆の位置は、鉄を折り曲げ、内径約0.5cmの環状に仕上げ、その環に内径3.5cmの鉄輪を通してつないでいる。こうした形態から、火箸と考える。

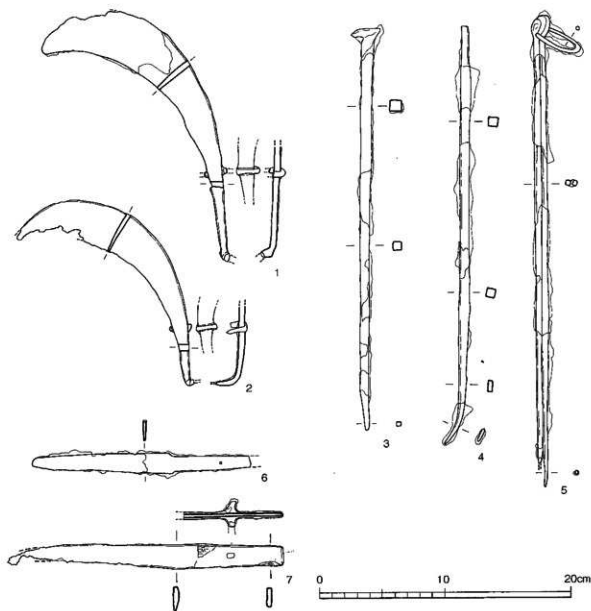
火箸



第38図 SK008実測図(1/20)

6・7は、刀子である。6は長さ17cm以上あり、刀身は約11cmである。茎の部分は6cm以上あるが、端部を欠くが、目釘穴が認められる。7は長さ22cm以上ある刀子である。柄の部分に木質が残されており、それを目安に測定すると、刀身は15cm以上ある。柄の部分には目釘が残されている。この遺構からは、以上の鉄器以外、土師質土器や陶磁器の出土はなく、時期の決定に決め手を欠く。しかし、この遺構の上には近世以降の水田層が堆積しており、それを除去後に検出された。このため、近世以降の掘り込みの可能性を考えることは出来ない。また、出土した遺物の釘や火箸、刀子の形態は、中世大友府内町跡の他の調査区で出土しているものと同じである。以上のことから、これらの遺物の時期は、16世紀後半と考える。

フロイス 埋納にあたっては、フロイスの日本史に、天正14年12月、島津氏が臼杵を攻めた際に、住民達が大事なものを地中に埋めて避難する記述がある。鉄鎌や刀子・火箸・長大な釘は貴重品であったと考えられ、豊後府内を島津氏が攻めた際に埋納されたことも想定できる。



第39図 SK008出土遺物実測図 (1/3)

SK009

SK009は、調査区の南西部、J・K-77で検出された遺構である。第40図に図示したように、この遺構は、表土下の包含層除去中に確認されたもので、浅く広い土坑の上面から南側にかけて、拳大から人頭大の川原石の分布が認められる。さらにその上面には整地を目的としたと考えられる、黄色粘土が図中の網かけの範囲を被っていた。

景徳鎮系

第41～43図に図示した遺物は、土坑及び周辺の川原石の散布中から出土したものである。第41図1は景徳鎮系の青花碗の底部で、高台内側に方形枠を中心に「長命富貴」の銘が書かれている。2は景徳鎮系の呉州赤絵の碗の口縁部である。3は復元口径10.1cmの白磁の皿で、底径5.2cm、器高は2.2cmである。

常滑焼
備前焼

4は常滑焼の壺の口縁部である。5は、頸部から胴部にかけての破片であるが、外面には自然が付着した陶器片である。常滑系の可能性が考えられる。6～8は備前焼の資料である。6の播鉢の摺り目は底部から口縁部にかけて、放射状に歯状工具で刻まれている。口径25.8cmで、赤茶色をしている。7・8は大甕の底部で、7の外面には削り調整があり、8の底径は26cmである。

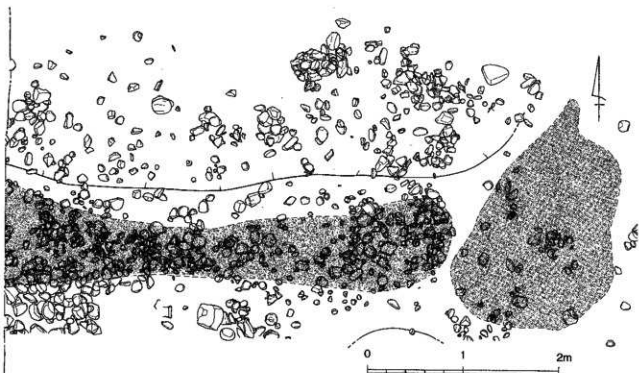
9～13は、京都系土師器の皿である。口径は9が小型で、口径が9cmであるが、10～13の口径は12.0～12.6cmで、器高は2.2cm～2.8cmで、ほぼ同じ口径をしている。9・12は口唇部周辺に煤が付着しており、灯明皿として使用されている。

瓦質土器

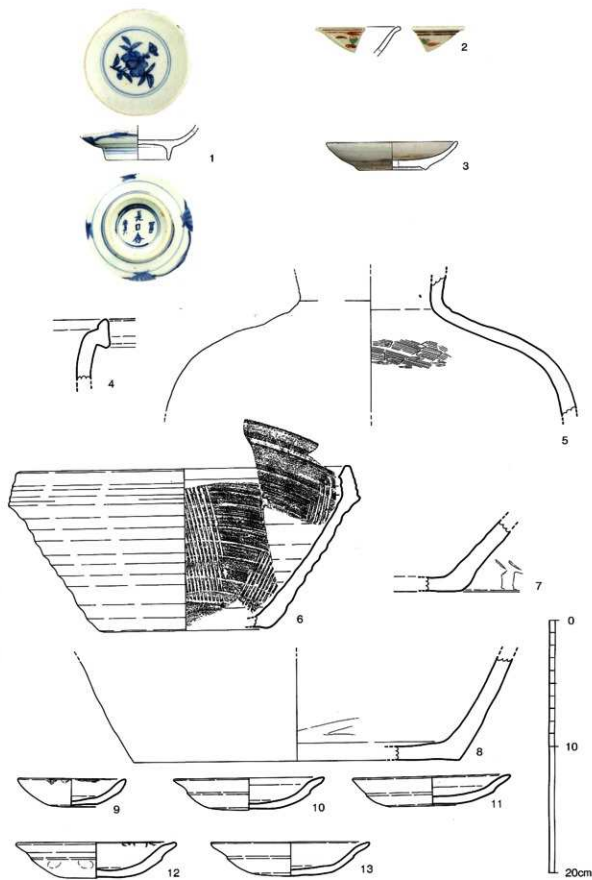
第42図1～4は瓦質土器である。1は口縁部が内湾する鉢で、外面には、巴文のスタンプ文が連続して押捺されている。2・3は直口する火鉢の口縁部であるが、2は口径41cmで、肥厚する口縁部の下部にスタンプ文が施文されている。3は口径32.5cmで、口縁部外面に平行する二状の細い突帯の間に銅銭状のスタンプ文が付く。外面は飽磨きで丁寧に仕上げられている。4は胴部に縦方向の耳が付く口径17.2cmの釜で、内面には刷毛目と指押さえの痕跡が残る。

5は弥生時代中期の壘形土器の底部である。6は断面が方形で、先端が尖る形状から、鉄釘の先端部と考える。

第43図1は備前焼の大甕の口縁部である。胴部の外面には甕による削りの器面調整痕が残る。2は



第40図 SK009出実測図 (1/40)



第41図 SK009出土遺物実測図① (1/3)

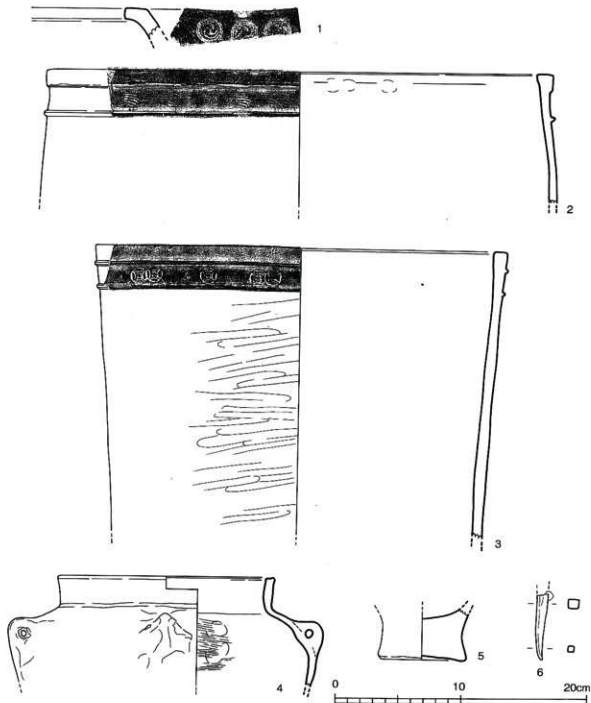
第2節 遺構と遺物

丸瓦で、表面に縄目印きがあり、内面には布目が観察される。3は阿蘇凝灰岩製の石塔の一部である。

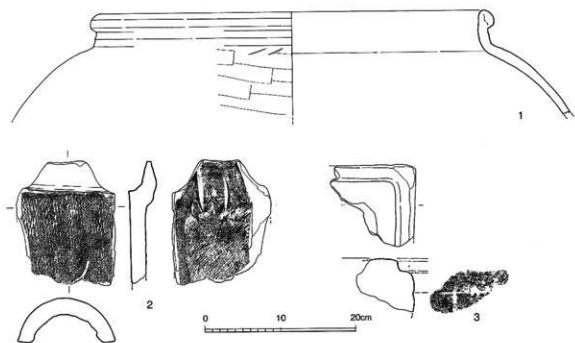
SK009の時期は、多様で、多時期の遺物が出土しているが、出土した京都系土師器から16世紀後葉と考える。

SK010

SK010は、調査当初、調査区を南北に半分に分け、西側半分から発掘を始めた。その際、SK009の東端で遺構の西半分のみ検出された。ところが、調査区の東半分の遺構を検出する作業では、残りの遺構を確認することは出来なかった。このため、第44図は、西半分の状態を図示している。遺構の規模は、南北2.1mであるが、東西は2.5m以上である。遺構の深さは浅く、内部から拳大の礫が検出された。



第42図 SK009出土遺物実測図② (1/3)



第43図 SK009出土遺物実測図③ (1/5)

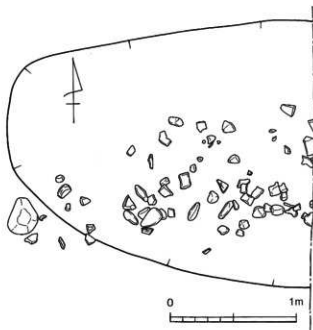
備前焼水屋甕 遺構内から出土した遺物は第45図に図示したが、1は備前焼の水屋甕である。口径25.3cmで、器面には自然釉が付いている。また胴部上位には粘土の貼付があり、アクセントを付けている。2は京都系土師器の大甕の底部である。3・4は京都系土師器であるが、3は口径11.2cm、器高2.5cmの皿形をしているが、4の口径は3とほぼ同じの11.8cmであるが、器高は3.3cmあり、椀形をしている。

時期は3・4の京都系土師器の形態から、16世紀後葉と考える。

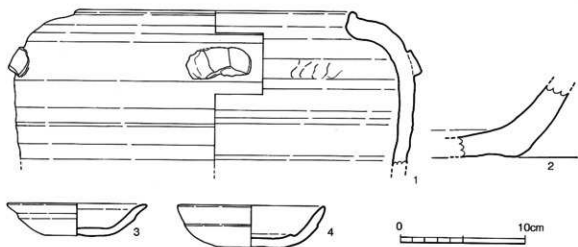
SK011

SK011は、調査区の南西隅、K-78で出された土坑で、第46図に図示した。この規模は、東西約1.9m、南北約1.9mのほぼ円形をしている。検出面からの深さは、約20cmであるが、北部が一段浅くなっているため、底面は1.4m×0.9mの楕円形になっている。遺構内の状況は、北から東側の壁沿いで礫が出土している。

遺構内からの出土遺物は少ない。第47図の底部の資料は、備前焼の壺と考えられる。底径13.2cmあり、暗茶褐色をしている。第48図は棒状の青銅製品であるが、内部は中空状になっており、一部が欠けているが、現状は長さ4.9cm、幅0.5cm、厚さ0.3cmで、重さは



第44図 SK010実測図 (1/30)



第45図 SK010出土遺物実測図 (1/3)

4.3gである。

遺構の時期の決め手となる、良好な資料の出土はないが、備前焼の壺や、検出された層位的な位置などから16世紀後葉と考える。

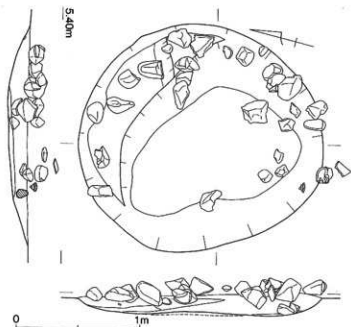
SK015

SK015は、K-74とK-75の西よりの境で検出された小土坑である。出土した遺物は、第50図5に図示した鉄釘と、第51図1・2に図示した銅銭がある。鉄釘は横断面方形で、長さ11.6cmである。第51図1の銅銭は草書体の「元祐通寶」で、北宋の1086年初鑄である。2は遺存状態が悪いため判読不能である。

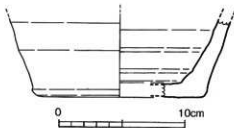
遺構の時期は不明である。

SK016

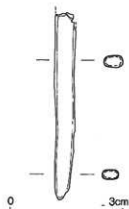
SK016は、調査区の中央部、K-75の南西隅で検出された土坑で第49図に図示した。遺構の規模



第46図 SK011実測図 (1/30)



第47図 SK011出土遺物実測図 (1/3)



第48図 SK011出土青銅製品実測図 (1/1)

鉄釘
銅銭

は、東西約2.7m、南北約2.7mで、円形をしている。検出面からの遺構の深さは約60cmで、北から東北側にかけて、深さ20~30cmの位置で段が付く。床面は東西1.1m、南北1.4の楕円形になっている。

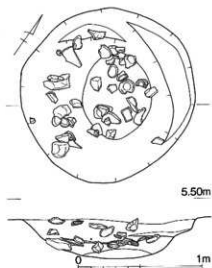
瓦質土器
菊花文

出土した主要遺物は、第50図1~4と第51図3の銅銭である。第50図1は瓦質土器の火鉢で、口縁部外面の細い二本の突帯間には菊花文のスタンプが押されている。2~3は内面に螺旋状の段が付く土師質土器である。2の口縁部は外反し、この種類の中では新しい傾向を示す。第51図3の銅銭は、篆書体の「熙寧通寶」で北宋の1068年の初鑄である。

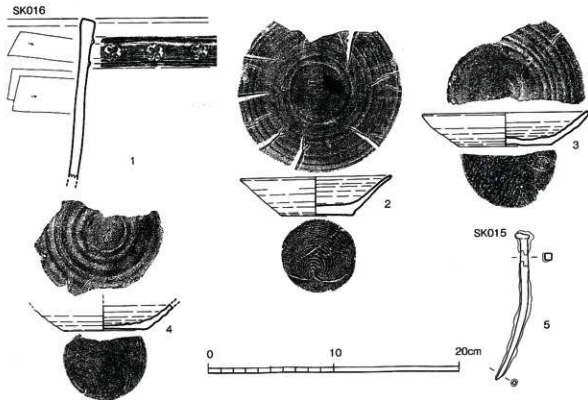
遺構の時期は、第50図2~4が出土していることから、16世紀前葉と考える。

SK020

第52図に図示したSK020は、調査区西壁沿いのJ-75で検出された土坑である。遺構の規模は、長軸約1.4m、短



第49図 SK016実測図



第50図 SK015・SK016出土遺物実測図 (1/3)



第51図 SK015・SK016出土銅銭実測図 (1/3)

軸約1.0mの小判形をしており、検出面からの深さは約20cmで、床面の規模は1.2m×0.7mである。遺構内からは礫や遺物が多く出土しており、廃棄土坑と考えられる。

出土した主要遺物は第53図に図示したが、1・2は土師質土器で、1は口径7.7cmの皿で、2は口径12.7cmの坏である。底部は糸切り底である。3～10は瓦質土器での鉢である。外面や内面に指圧痕が残り、4の内面底付近は莚削りが認められる。9の底部外面は格子叩きによる調整痕が残されており、土鍋と考えられる。5・6の内面には縦方向の掃り目が刻まれており、瓦質の播鉢である。口径は、8が29.1cm、9が41.6cm、10は42.2cmである。

遺構の時期は、1・2の在地系土師質土器の形態から、14世紀後葉と考える。

SK021

SK021は、K-75の南端で検出された土坑で、遺構の西側は調査区外となる。遺構の規模は、南北約1.2m、東西約1.5m以上で、方形をしている。

遺構内からの出土遺物は、第56図に図示した鉄釘2点である。完全な形で出土した第56図2は全長11.2cmで、断面は0.6cmの方形をしている。1は先端を欠くが、長さ5.6cm残されており、断面は0.4cmの方形である。時期は不明であるが、遺構の形状や鉄釘の出土から木棺墓の可能性もある。

SK022

SK022は、J-77で検出された土坑で、第55図に図示したようにSK139の上面に広がる集石を伴う浅い土坑である。確認された遺構の規模は、東西3.7mで、西側は調査区外に延びている。南北幅は調査区の西壁で約3.7mである。遺構の深さは浅く、皿状をしている。

兵洲赤絵

第54・57図に図示したのが出土遺物であるが、第54図1は景德鎮窯系の兵洲赤絵の碗の口縁部である。2は景德鎮窯系の青花碗の口径9.5cmの口縁部である。3は口縁部が屈曲する龍泉窯系の青磁皿で、口径は12cmである。

備前焼

4～6は備前焼で、4は壺である。5・6は播鉢で5は、口径26cmで、底部から放射状に歯歯状工具で、掃り目が刻まれている。口縁部外面の凹線も明瞭ではない。6は口径25.4cm、底径13.8cm、器高14.2cmで、内面の掃り目には斜め方向が加わり、口縁部外面に明瞭な凹線が入る。

7～12は土師質土器である。7・8は糸切り底の在地系土師質土器で、7は口径7.1cm、底径4.7cm、器高1.4cmの皿である。8は口径12.3cm、底径8.4cm、器高3.7cmの坏である。9～12は京都系土師器であるが、9～11の口径は12.5cm前後の同じ規格をしているが、12は口径16.8cmで、中世大友府内町跡で出土する同類の中で、最大規格のグループに属する。13は瓦質土器の鉢で、14は釜である。両者とも磨きされている。15は土鍋の脚である。

和泉砂岩製

第57図1は軒平瓦で、2は和泉砂岩製の茶臼と考える。8区分で8～12条の掃り目が刻まれる。

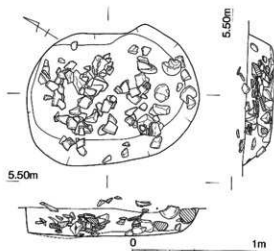
SK022の時期は、京都系土師器が一定量出土することや、斜め掃り目の備前焼の播鉢が伴うことから、16世紀後葉と考える。

SK023

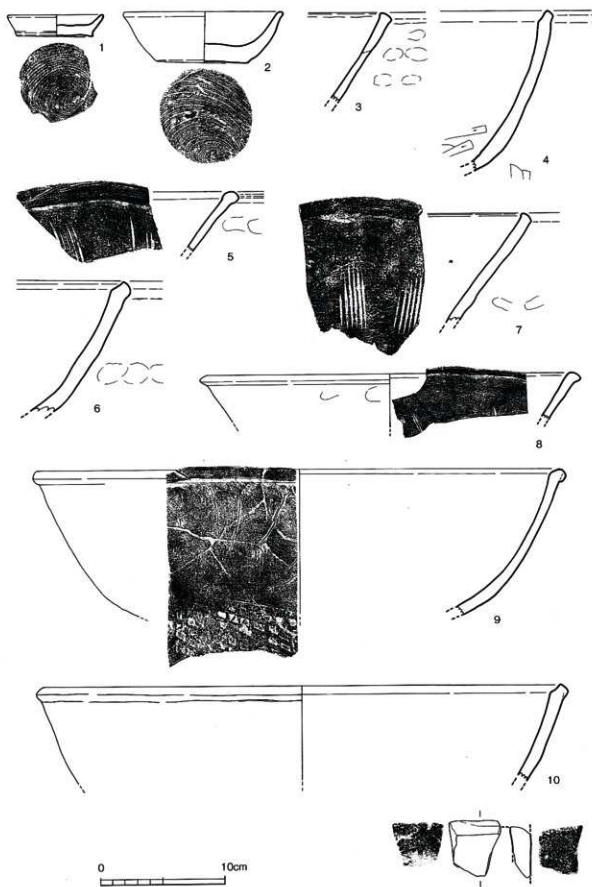
SK023は調査区の南壁沿いK-78で検出された浅い土坑である。東西方向に約5m、南北方向に1.5mの範囲で確認されたが、遺構の南側大半は調査区外となっている。

出土した遺物は、第56・58図に図示したが、3は龍泉窯系の梅瓶の底部と考えられ、厚い

龍泉窯系梅瓶

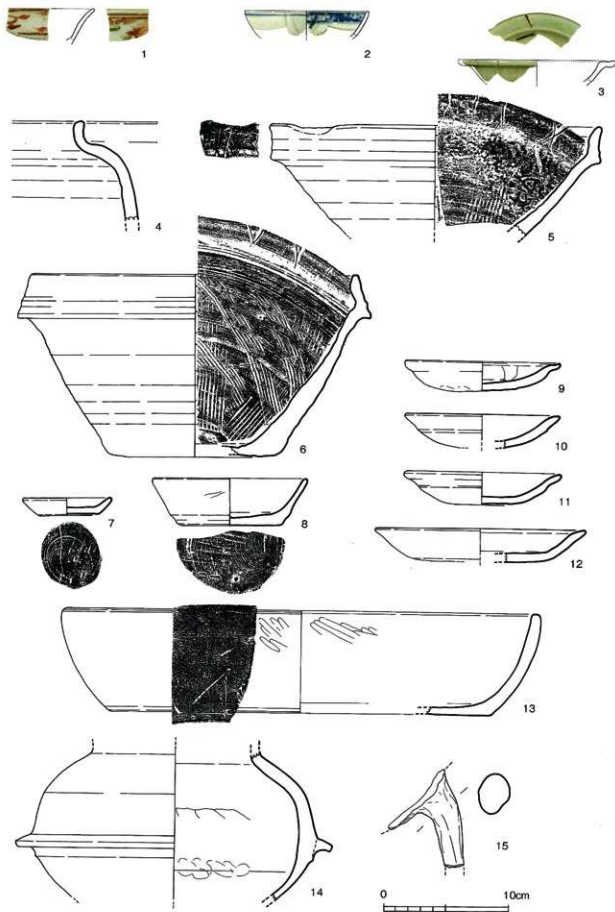


第52図 SK020実測図 (1/30)



第53図 SK020出土遺物実測図 (1/3)

第2節 遺構と遺物



第54図 SK022出土遺物実測図① (1/3)

器壁をしている。4は斜め摺り目入る備前焼の摺鉢であり、5は備前焼の壺の底部で、削り調整の痕跡がある。6は屈曲する瓦質土器の鉢で、内面には刷毛目が残る。7は口径8.2cm、器高2cmの京都系土師器の皿である。8は弥生時代中期の甕形土器の底部である。9は砥石の破片で、両端を欠くが、両面とも使用されている。

鉄釘 10～12は鉄釘である。いずれも、一方を扇形状に打ち広げ、折り曲げて打面を造り出している。大きさは、完存している10は長さ8cm、厚さ0.5cm、重さ9gであり、同じく12は長さ5cm、厚さ0.4cm、重さ3.1gである。11は先端を欠くが、長さ8cm以上あり、厚さは0.5cmで、重さは9gである。

本州タイプ吊り籠 第58図には出土した瓦を図示した。いずれも丸瓦で、1・2は玉縁部分あり、内面に布目と本州タイプ吊り籠痕が残る。3は巴文が付いた軒丸瓦である。

遺構の時期は、4の備前焼の摺鉢や7の京都系土師器から、16世紀後葉と考える。

SK027

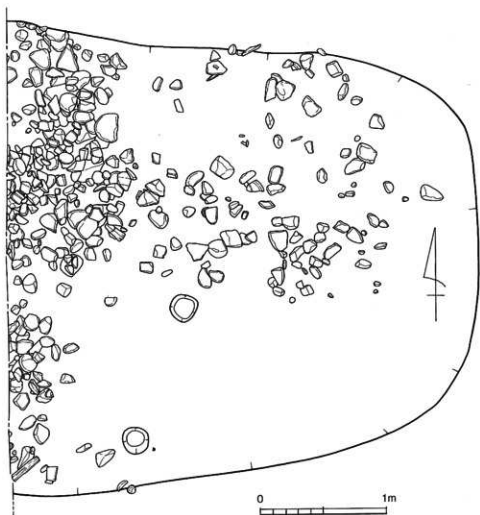
SK027は、東西約1.3m、南北約0.7mの楕円形の小土坑で、SK023の上面で検出された。

出土遺物は第56図13の口径8.4cmの京都系土師器で、16世紀後葉と考える。

SK029

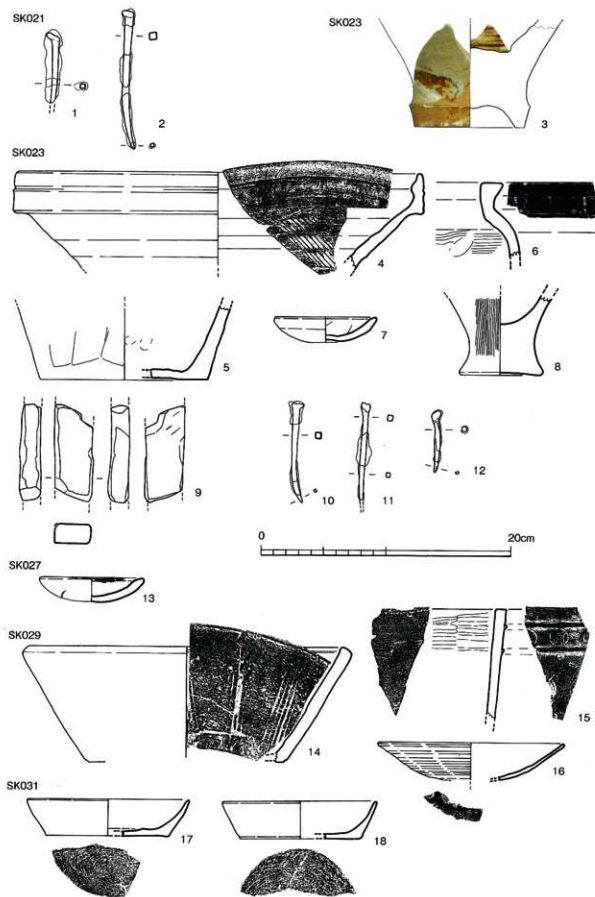
SK029は、K-75で検出された約70cm×約40cmの東西方向を向いた卵形の土坑である。

出土した遺物は第56図に図示した14～16であるが、14は、口径25cmの瓦質土器の摺鉢である。



第55図 SK022実測図 (1/30)

第2節 遺構と遺物

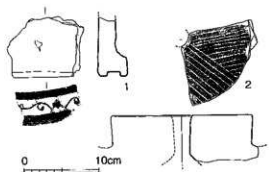


第56図 SK021・023・027・029・031出土遺物実測図(1/3)

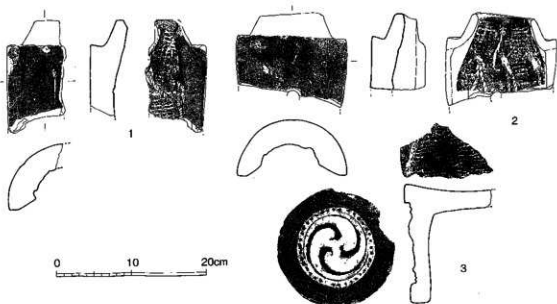
内面には、底部から放射状に4~5条の櫛歯状工具で入れた溝り目がある。15は瓦質土器の火鉢である。直口する口縁部外面に廻る二条の細い突帯の間に銅銭状のスタンプ文を押し捺している。内面は横方向の篋磨きで仕上げている。16は、器壁の薄い内外面にロクロ目の付く土師質土器の坏である。底部には糸切り痕があり、色調は白色に近い、口径は15.0cmで、器高は3cm、底径は6cmである。在地系土師質土器とは趣を異にする。

大内館跡

この遺構の時期を16の白色系の土師質土器に求めると、類似する資料がまとまって出土する周防巨大内館跡がある。それによると15世紀中葉と考える。



第57図 SK022出土遺物実測図② (1/5)



第58図 SK023出土遺物実測図 (1/5)

SK030

第59図に図示したSK030は、J-75の北寄りで検出された小土坑である。遺構の規模は、平面形が東西64cm、南北34cmの楕円形をしており、深さは、検出面から15cmである。壁の立ち上がりは急で、底面は50cm×25cmである。

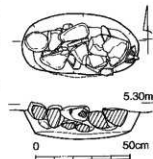
遺構内から、凶化出来るような遺物の出土はなかったが、人頭大よりやや小さい川原石を、意図的に充填している。

遺構の時期は、良好な出土遺物がないたため、不明である。

SK031

SK031は調査区のほぼ中央のK-76の北寄りで検出された土坑である。遺構の規模は、長軸約60cm、短軸約35cmの楕円形をしている。

遺構内から出土した遺物は第56図17・18に図示した。底部近くの



第59図 SK030実測図 (1/20)

器壁が厚く、口縁端部にかけて尖るように立ち上がる類似する形態の2点は、17が口径12.8cm、器高は3cm、底径9.8cmで、18は口径12.3cm、器高3cm、底径9.6cmで、法量も類似する。

遺構の時期は、2点の在地系土師質土器から14世紀末から15世紀前葉と考える。

SK034

SK034は調査区中央北寄りのK-75で検出された土坑で、その規模は、東西約1.0m、南北約0.9mの、緩い楕円形をしている。

遺構内からは、第62図1に図示した在地系土師質土器が出土している。口径は7.2cm、器高2cmの小型の坏で、口唇部から口縁部内面にかけて、煤が付着しており、灯明皿として使用されている。

SK036

第60図に図示したSK036は、K-75で検出された土坑で、南北約1.5m、東西約0.9mの規模で、床面は西寄りが一様深く、検出面からの深さは約40cmである。全体に不整形であり、廃棄土坑と考える。

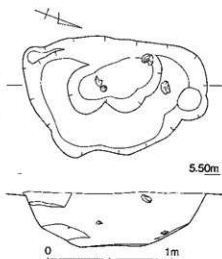
第61図は遺構内に流れ込んだ状態で出土した土師質土器である。1・2は皿で、2は底部が厚く、口縁部の立ち上がりがないが短い、容器として機能しない退化形態を呈している。また、1も口縁部の立ち上がりが短い。3～5は口径が11.6cmから13cmの坏である。3・4の口縁部は底部付近の器壁が厚く、端部にかけて尖るように細くなる。また、5の口縁部の器壁は比較的均一で、内湾気味に立ち上がる。

遺構の時期は、こうした在地系土師質土器の形態的特徴から、14世紀後葉から15世紀初頭と考える。

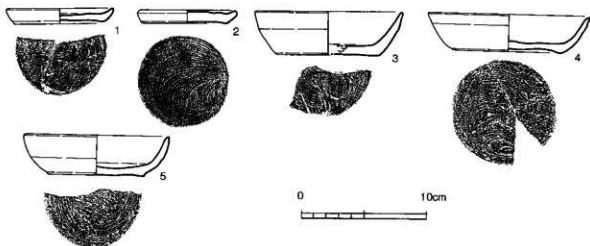
SK037

K-75の南西部で検出された、上面形が約1mの円形の土坑である。遺構内からは、第62図2・3に図示した在地系土師質土器の坏のほぼ完形品が出土した。2は口径12.4cm、底径8.4cm、器高2.8cmで、口縁部中位の器壁が厚くなる。3は、口径12cm、底径8.1cm、器高3.0cmで口縁部

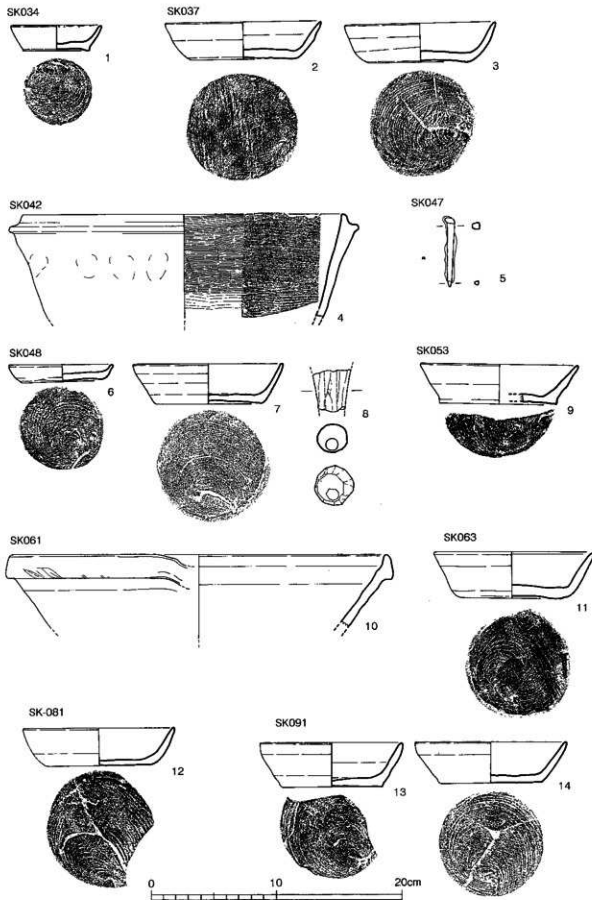
灯明皿



第60図 SK036実測図 (1/30)



第61図 SK036出土遺物実測図 (1/3)



第62図 SK034・037・042・047・048・053・061・063・087・091出土遺物実測図 (1/3)

第2節 遺構と遺物

の器種はほぼ均一である。

遺構の時期は、この2点の在地系土師質土器から14世紀代と考える。

SK040

SK040は、調査区の北部K-74で検出された比較的大型の土坑である。第63図に図示したが、南北約3.4m、東西約3.7mの、隅丸方形をしており、東北隅はSK 075 と切り合い、新しい。検出面から平坦な底面までの深さは、1.1mで、その規模は、南北2.6m、東西約3.0mである。

銅銭
備前焼
土鍾

第64・65図に図示したのが出土遺物である。第64図の銅銭は、「天禧通寶」で、北宋の1017年の初鑄である。第65図1・2は備前焼の壺で、3~8は在地系土師質土器である。8には焼成前の穿孔がある。9~13は紡錘形の土鍾である。14は砥石である。

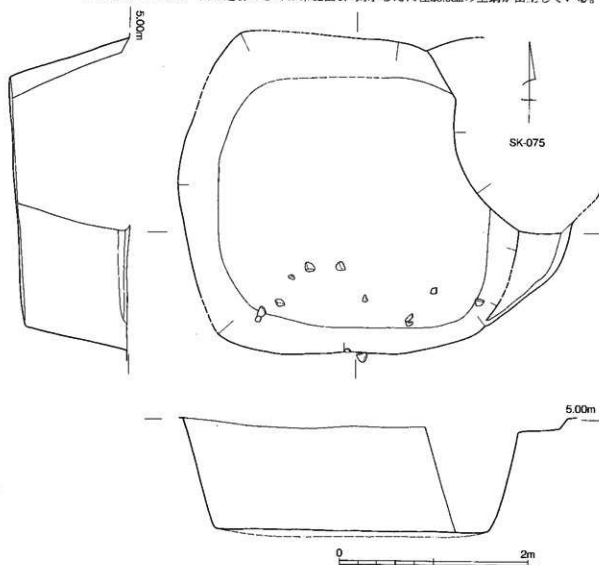
遺構の時期は、4・6の器高が高く、口縁部が外反する土師質土器の特徴から14世紀末から15世紀前葉と考える。

SK042

石組遺構

SK042は、調査区の北端部のK-74で検出された土坑でSX012とした石組遺構の南側の整地土層の上で検出された土坑である。遺構の輪郭など、不明な部分が多い。

出土遺物としては 出土遺物としては第62図4に図示した口径25.6cmの土鍋が出土している。こ



第63図 SK040実測図 (1/40)

の土鍋は焼成が良好で、瓦質に近い。器形は、口縁部が肥厚し、退化した脚状の突帯が廻る。底部は丸底と想定できる。器面調整は、外面が指押さえの後、撫でて仕上げられており、内面は横方向の刷毛目で調整されている。

土鍋の時期は14世紀代と考えられるが、遺構の時期は16世紀代の遺構に乗っているため、遺物と同じと考えることはできない。

SK047

SK047は、調査区の中央部のK-75とK-76に渡り検出された土坑で、SK002の西側にあたる。遺構の規模は東西約2.3m、南北約1.9mの縦い方形をした浅い土坑で、土師質土器の小破片がわずかに出土した。それ以外では、第62図5に図示した鉄釘が出土している。全体的に錆に被われているが、長さは5.4cm、断面は0.6cmの方形をしており、重さは6gである。

鉄釘

遺構の時期は不明である。

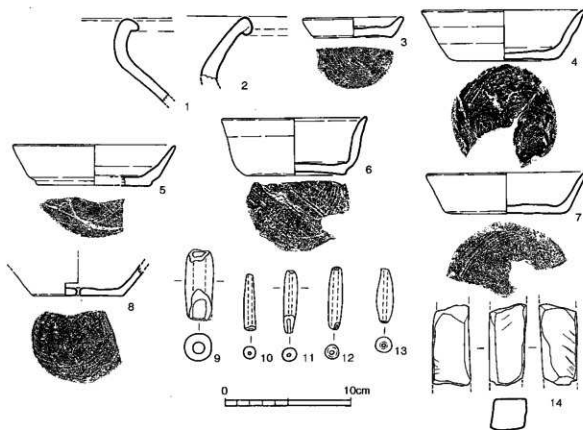
SK048

SK048も調査区の中央部のK-76で検出された土坑で、SK002に東側を切られている。確認できる遺構の規模は、1.3m×1.2mで、本来は東北から北西にかけて延びる楕円形の土坑であったと想定できるが、SK002で、東北部を切られている。

第62図6～8に図示した3点は遺構内から出在地系土師質土器 土した主要遺物である。6・7は在地系土師質



第64図 SK040出土銅銭実測図 (1/1)



第65図 SK040出土遺物実測図 (1/3)

第2節 遺構と遺物

土器で、6は口径8.2cm、底径6.4cm、器高1.4cmの皿で、7は口径12cm、底径8.5cm、器高3.1cmの坏である。8の器面は削り調整で、孔の貫通した遺物である。注口部であろうか。

遺構の時期は、6・7から14世紀後半と考える。

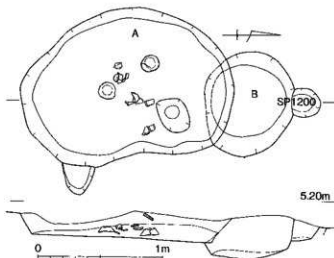
SK050

SK050はJ-74で検出された大型土坑SK109の上面で検出された土坑で、直径約80cmで、西側の一部は調査区の西壁外となっている。出土遺物は、第161図1の銅銭が出土しているが、鏡は判読不能である。

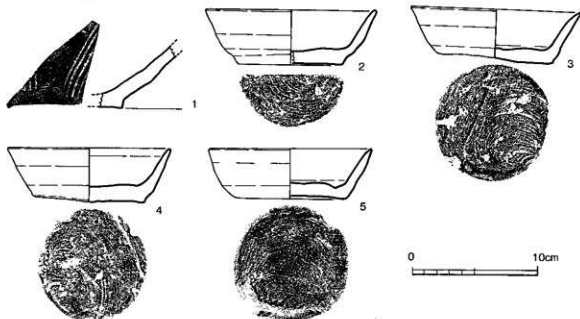
SK052

SK052はK-76で検出された土坑で、第66図のように、南北1.7m、東西1.2m、深さ20cmの土坑Aと直径約80cmの土坑Bが南北に連なり検出された。

遺物は土坑Aからまともに出土しており、第67図に図示した。1は瓦質土器の摺鉢であるが、2～5は在地系土師質土器である。口径は13～13.6cm、底径は8.4～9.4cm、器高は3.8～4.3cmで、14世紀代と考える在地系土師質土器よりも口径が大きく器高が高い。時期は、14世紀後半から15世紀初頭と考える。



第66図 SK052A・B SP1200実測図 (1/30)



第67図 SK052出土遺物実測図 (1/3)

SK053

SK053はK-75で検出された南北2.0m、東西1.2mの楕円形をした土坑として検出したが、発掘調査の結果、南北に連なる2つの土坑であることがわかった。2つの土坑は直径約1.2mのA土坑と、長さ1.8m、幅1.2mのB土坑に区別できるが、遺物は混同している。

遺構内からは第62図9に図示した在地系土師質土器の坏が出土している。この遺物は、B土坑出土であるが、口径12.6cm、底径8.4cm、器高3.1cmで、14世紀後半と考える。

SK054

第68図に図示したSK054はK-75からK-76にかけて検出された土坑で第68図に図示した。遺構の規模は、1.6m×1.2mで検出面からの深さは、最深部で35cmである。遺構内からは、第69・70図に図示した遺物が、流れ込んだように堆積した焼土（薄いアミ）や炭の層（濃いアミ）と一緒に出土し、火災に遭った状態のものを一括して廃棄したような状況である。

第69図は一部を欠くが、北宋の1078年初鑄の草書体の「元豊通寶」で直径2.4cm、重さ23gである。第70図1は備前焼の壺で、口径は25cmである。口縁部は玉縁に仕上げられ、肩部には沈線が廻る。色調は灰褐色である。

2は京都系土師器で、口径6.8cm、器高1.9cm、上げ底の底径は2.5cmである。色調は白灰色で、3~11の在地系土師質土器と明らかに胎土が異なり、搬入品の可能性が高い。3~6は皿である。口径は7.4~8.2cmで、器高は1.0~1.3cmで、底径は6.0~6.6cmである。4の胎土には金色の雲母が混入する。7は口径7.4cm、底径4.7cm、器高2.3cmの小坏である。8~10は口径11.8~12.6cm、底径7.4~9.8cm、器高2.9~3.1cmの坏である。口縁部は、底部近くの器壁が厚く、口縁端部は尖る。8は内湾気味になり、9は外反する。11は底径7.8cmの坏の底部である。

12は口径30cm、器高12.5cmの丸底の土鍋である。胴部は直立し、口縁部全体は外反するが、端部は内湾する。器面調整は、外面が叩きで、底部は格子状の叩きになる。内面は横方向の刷毛目で、底部近くは放射状になる。

13~17は鉄製品である。

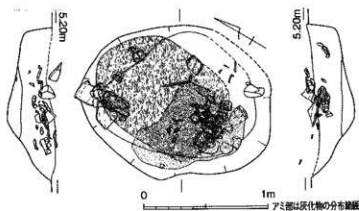
13~16の鉄製品は、サイズは様々であるが、鉄釘である。打面は、団扇状に打ち返した部分を折り曲げ、形成している。断面は方形である。13は打面を欠いている。

17は屈曲した鉄製品であるが、器種不明である。

SK054から出土した遺物は、出土状況から、一括性の強い遺物ととらえることが出来る。その時期は、2の京都系土師器の皿や、1の備前焼の壺、在地系土師器の形態などから、14世紀中葉から後葉と考える。

SK059

SK059はK-75で検出された土坑で、第72図に図示している。規模は直径1.6mのほぼ円形をしており、

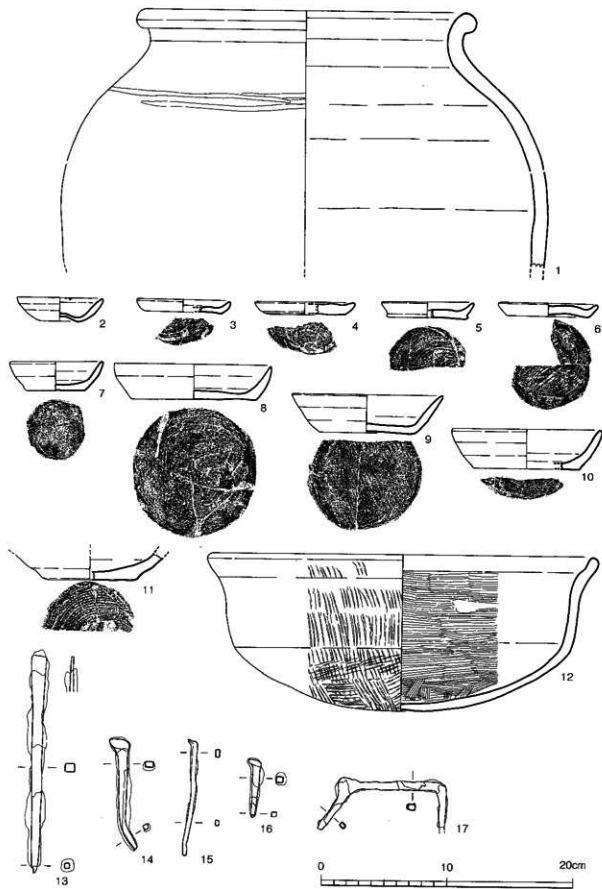


第68図 SK054実測図 (1/3)

備前焼



第69図 SK054出土銅銭実測図 (1/1)



第70図 SK054出土遺物実測図 (1/3)

壁は垂直に立つ。深さは検出面から約2mの位置で、狭くなり、直径約80cmの二段掘りとなり、さらに深くなる。しかし、狭小で、深さが増すため、掘下を中止した。

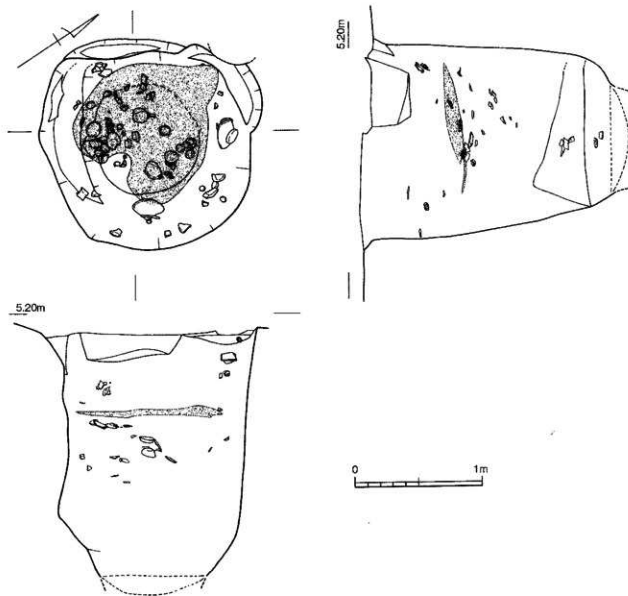
在地系土師質土器 遺構内からは、炭化物の層があり、在地系土師質土器を中心とした遺物が流れ込んだ状態で検出された。土坑を埋め立てる際に、一括廃棄された状態である。

その遺物は第71・73図に図示した。第73図1~4は皿で、口径は7.8cmから8.2cmで、底径は5.9~6.4cmである。器高は、1.2~1.4cmで、規格化しているが、2以外は容器としての機能が退化している。

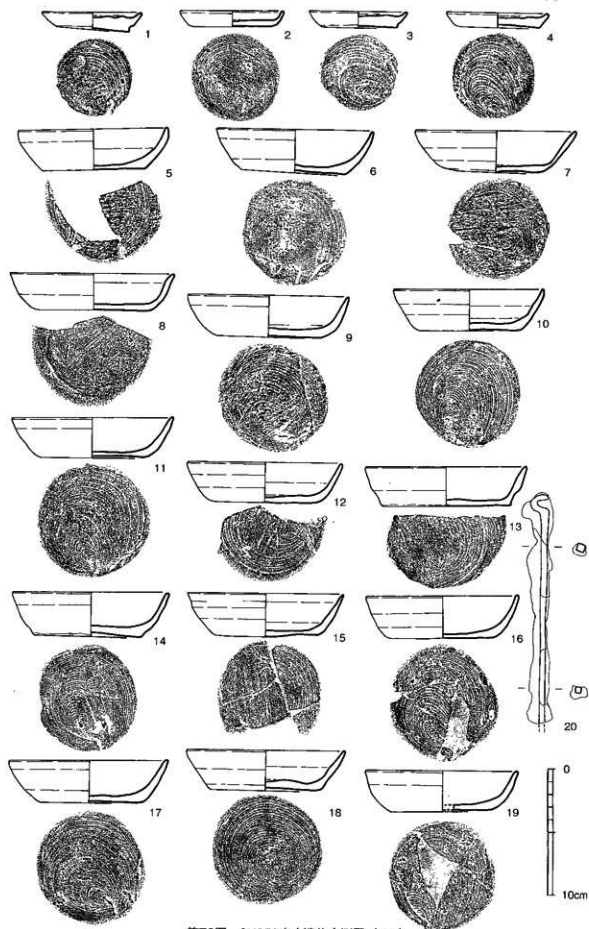
5~19は坏であ



第71図 SK059出土銅銭 (1/1)



第72図 SK059実測図 (1/30)



第73図 SK059出土遺物実測図 (1/3)

るが、口径は、12~13cmで、底径は13以外7.4~8.6cmで、器高は2.9~3.5cmで、規格性が認められる。しかし、口縁部の形態は、5・6・16・17は内湾傾向が認められる。また、7・8・13・18は口縁部中位の器壁が厚くなるが、他は、底部から口縁部にかけて尖るように延びる。

20は断面が方形の鉄釘である。第71図1は1094年の初鋳の「招葉元寶」、2は1101年の初鋳の「聖宋元寶」である。

井戸

K059は井戸枠を抜かれた井戸の可能性が高い。時期は土師質土器の坏の形態から14世紀中葉と考える。

SK060

SK060はJ-75で検出された土坑で、第74図に図示した。南北1.5m、東西も約1.5mで検出されたが、西半分は調査区外に延びている。遺構内部は、東側から階段状に深くなり、最深部は、検出面から約70cmを測る。遺構内から拳大の河原石が出土したものの、遺物は少ない。

代表的な出土遺物は第74図に図示した2点の鉄釘である。1は打面も残る、ほぼ完形品で、長さは8cmである。2は打面と先端を欠くが7.3cmで、2点とも断面は1辺0.6cmの方形である。

遺構の時期は、決定する良好な資料がないため不明である。

SK061

SK060はJ-75で検出された幅約40cm、長さ約1mの南北に細長い土坑である。遺構の深さは浅く、約10cm程度であった。

東播系

遺構内からは、第62図10に図示した口径29.7cmの14世紀代の東播系須恵質土器の鉢が出土している。

SK063

SK063はK-75で検出された、東西35cm、南北45cmの小土坑である。深さは約10cmで、遺構内からは第62図11に図示した完形品の坏が埋置された状態で出土している。この坏は、口径12.8cm、底径8cmで、器高は3.6cmである。口縁部の形態は、端部が尖るように外反し、14世紀後葉と考える。

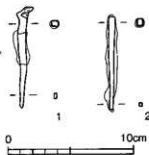
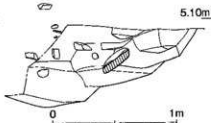
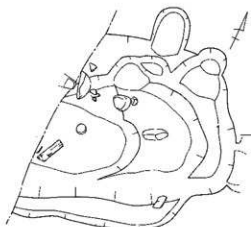
SK066

SK066はK-75の西寄りで検出された第76図に図示した土坑である。上面は南北1.5m、東西1.1mの規模であるが、二段になった深さ約10cmの底面は南北1m、東西0.7mの方形をしている。遺構内からは、在地系土師質土器を中心とした遺物が、まとまって出土しており、一括廃棄された可能性が高い。

在地系土師質土器

第77図に図示したのは、出土した主要遺物である。1は口縁端部が屈曲する土鍋で、2は鉢状になる土器である。両者とも内面は横方向の刷毛目調整で、外面は、指圧痕が残る。

土鍋

第75図 SK060出土遺物
実測図 (1/3)

第74図 SK060実測図 (1/30)

3~9は在地系土師質土器である。3・4は

第2節 遺構と遺物

皿で口径は8.1~8.5cmで、底径は6.8~7.4cmである。5~8は坏で口径は12.5cm前後、特に5~7は、底径も8cm前後、器高は3.5cm前後と規格性があり、先端が尖る口縁部形態も類似している。しかし、8は底径が10.4cmと大きく、口縁部は中位の器壁が厚くなる形態である。6・8の底部には板状圧痕が残されている。

9は口径が12.7cm、底径が6cm、器高は3.7cmで、口縁部の器壁は均一で端部まで延び、碗形をしている。胎土も坏とは異なり、石英粒を多く含む。

刀子

10は長さ8cm鉄製品で、幅1.4cmの断面形態から、先端部に近い刀子の破片と考える。

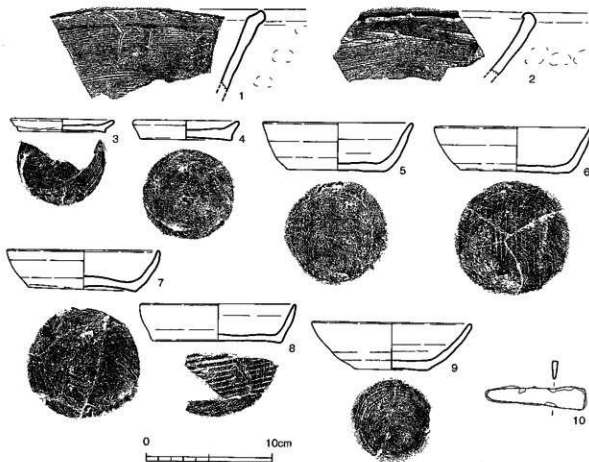
SK066の時期は、8の口縁部中位の器壁が厚くなる形態の坏や、9の底径が口径の半分になる碗が存在することから、14世紀前葉から中葉と考える。

SK071

SK071はJ-75で検出された細長い土坑で、第78図に図示しているように西側は調査区外に延びている。確認された遺構の規模は、幅約90cm、長さ2m以上で、深さは検出面から約20cmである。遺構内からは、拳大の礫が流れ込んだ状態で多量に出土した。遺物は、それに混在しており、第81図1・2に図示している。1は断面をした脚、2は口縁部で、いずれも瓦質土器である。



第76図 SK066実測図 (1/30)

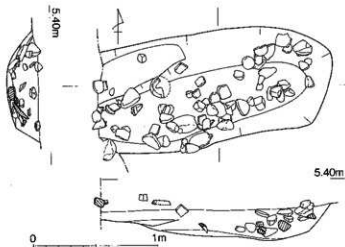


第77図 SK066出土遺物実測図 (1/3)

SK072

SK072はK-75の南西隅で検出された土坑で、第79図に図示した。規模は長さ1.1m、幅0.6m、深さ約15cmの土坑である。床面は平坦である。遺物は、遺構の上面で第81図3の土師質土器の皿が出土した。遺構は形態から土坑墓の可能性はある。時期は14世紀代とかがえられる。

土坑墓



第78図 SK071実測図 (1/30)

SK074

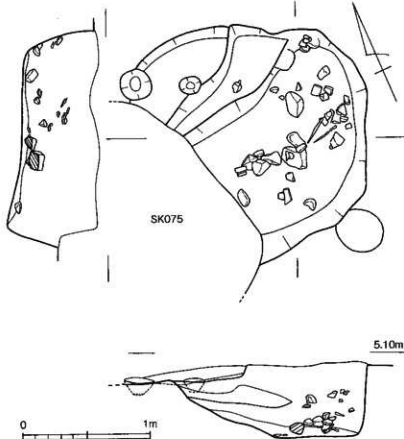
SK074はK-74で検出された土坑である。第80図に図示しているように南西部をSK075で切られている。残された規模は、南北約2m、東西もほぼ同じ程度と想定される。遺構は、北側から段々に深くなり、南側では検出面から約60cmである。

遺構内からは、廃棄状態で遺物や礫が出土した。第81図4~8がそれであるが、4は底径20.2cmの備前焼の壺で、5は白色系の土師質土器の椀である。6は古墳時代の小壺である。7は仕上げ砥石で、8は先端を欠く鉄釘で20.7cmが残されている。

白色系

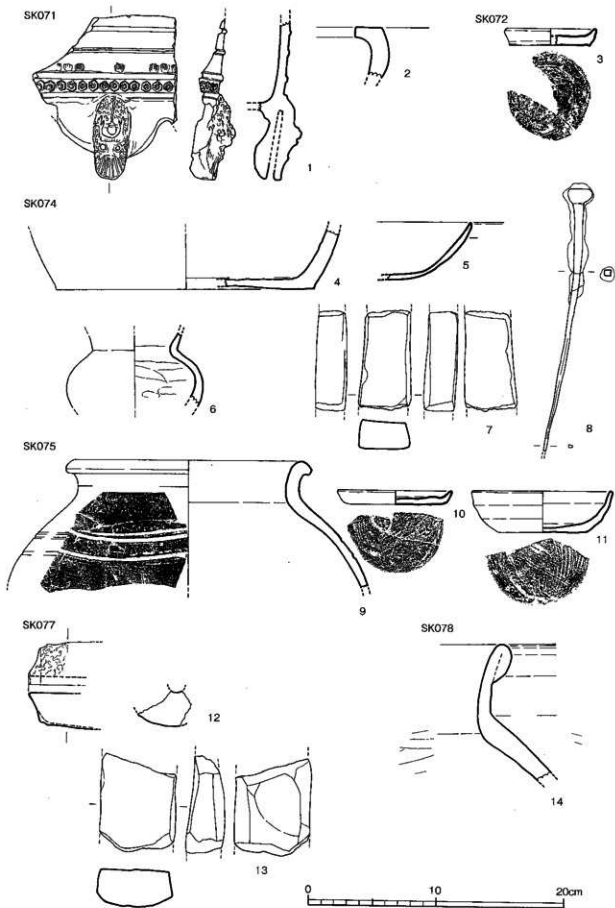
SK075

SK075はK-74で検出された土坑で、第82図に図示しているように西側をSK040で切られる。確認された遺構の規模は、直径約2mで、急角度で掘り込まれている。検出面から約2mの深さまで調査したが、底面の確認は出来なかった。確認された最深部は



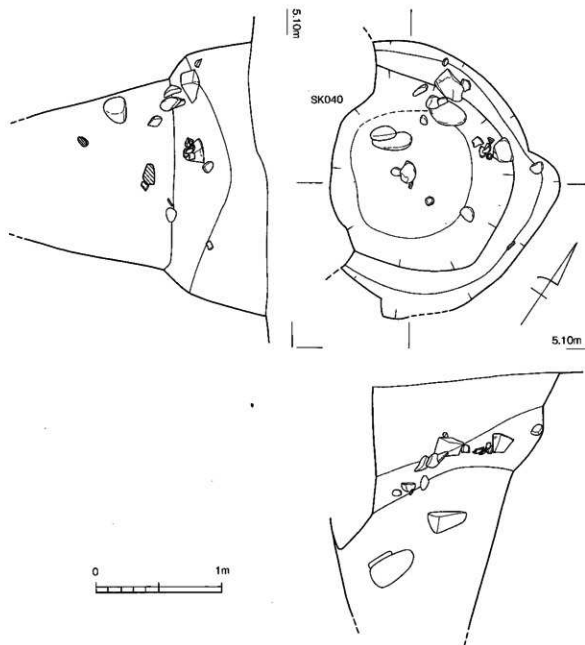
第80図 SK074実測図 (1/30)

第2節 遺構と遺物



第81図 SK071・072・074・075・077・078出土遺物実測図 (1/3)

- 井戸 直径約1mで、井戸の可能性もあるが、井戸枠の痕跡は認められなかった。遺構内からは人頭大の礫が多く出土し、埋め立ての際に投棄された状態である。
- 備前焼 主要な出土遺物は第81図9～11に図示したが、9は灰褐色をした口径17.6cmの備前焼の甕である。10・11は土師質土器で、10の皿は口径9cm、底径8cm、器高1.1cmである。11は口径11cm、底径6.8cm、器高3.7cmで、口径に比べ底径が小さい椀形をしている。
- 時期は土師質土器の形態から14世紀中葉と考える。
- SK077
- 炭化材 SK077は調査区の南端、K-78で検出された土坑で、第83図に図示した。南北約1.4m、東西1.3mの方形をしており、検出面から、床面までの深さは約20cmである。遺構内からは炭化材が多量に出土し、床面から約10cm上位に木炭層が広がっている。
- 木炭層



第82図 SK075実測図 (1/30)

第2節 遺構と遺物

フィゴ羽口 出土遺物は多くないが、第81図12・13に図示したフィゴの羽口と砥石片がある。12は先端部の破片であるが、直径1.2cmの通風孔が認められる。先端部は熱のため赤褐色をしており、もろい。13の砥石は両端を欠くが幅は約5.5cmあり、仕上げ砥石である。

SK077は炭化物の層や多量の炭化材、フィゴの羽口、砥石が出土することから、鍛冶に関連する遺構である可能性が強いと考える。時期は、決定できる良好な資料の出土がないが、検出状況から16世紀後半と考える。

SK078

SK078は調査区の南端、K-74で検出された土坑で、SK040の中央部に掘り込まれた第84図に図示した遺構である。

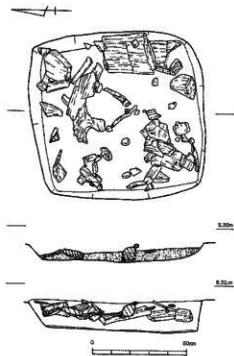
確認できる遺構の規模は、東西約3m、南北3.3mで、深さは検出面から約80cmである。底面は幅約80cmで南北に細長い形状である。出土遺物は多くないが第81図14に図示した備前焼の大甕と第85図の銅銭がある。14は口縁部が玉縁で、暗赤褐色をしている。銅銭は唐の621年初鑄の「開元通寶」である。

遺構の時期は15世紀以降と考える。

SK079

SK079は調査区の南端、J・K-78で検出された土坑で、第86図に図示した。直径約1mと約0.8mの二つの土坑が重なったものである。深さは南側が検出面から約20cmであるが、北側は約10cmである。遺構内からの遺物の出土は多くないが、第87図1-2に図示した。1は口径26.5cmの土鍋で、口縁部は屈曲し、端部が肥厚する。器面調整は、内面に横方向の刷毛目、外面は撫で仕上げで、底部には格子状の叩き調整が認められる。2は口径12.2cm、底径9.6cm、器高31cmの坏で、口縁部の中位の器壁が厚くなる形態である。

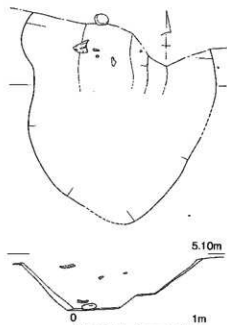
遺構の時期は、坏の形態から14世紀中葉と考える。



第83図 SK077実測図 (1/3)

備前焼
銅銭

土鍋



第84図 SK078実測図 (1/30)



第85図 SK078出土銅銭実測図 (1/1)

SK083

SK083は調査区の南端、K-78で検出された土坑で、第88図に図示した。検出された遺構の規模は、長軸1.3m、短軸0.9cmの規模で、深さは約30cmである。遺構内からの遺物の出土は多くない。しかし、遺構上部から上面にかけて、扁平な礫が多数出土した。

二次焼成

第87図3に図示した出土遺物は、小破片であるが、瓦質土器の香炉と考えられる。二次焼成を受けており、灰白色をしている。遺構の時期は不明である。

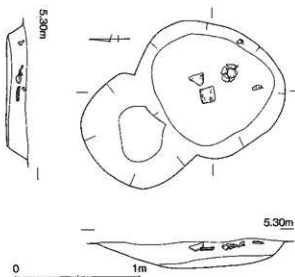
SK085

瓦質土器

SK085はJ・K-75・76の境界杭の部分で検出された遺構である。第89図に図示したが、規模は直径約90cmの円形で、深さは約70cm、底径は50cmである。遺構内からは第87図4に図示した、瓦質土器の底部が出土した。この土器は、底部に板状圧痕が残り、外面は刷毛目の後撫で仕上げである。内面には指圧痕が認められる。14世紀代の臺の底部と考える。

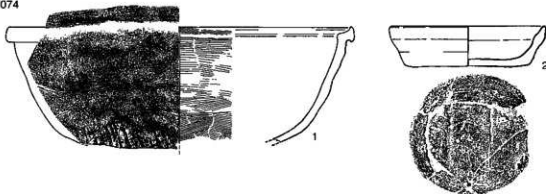
SK086

SK086はJ・K-75で検出された遺構で、第90図に図示したように西側部分は調査区の外に延びている。確認できる遺構の規模は、南北約3.7m、東西は3m以上で、検出面からの深さは約80cmである。遺構内の底面は不規則で、炭化物の層に遺物が混在する場所が3ヶ所が認められた。このため、複数の土坑が重なりあっていることも考えられる。



第86図 SK079実測図 (1/30)

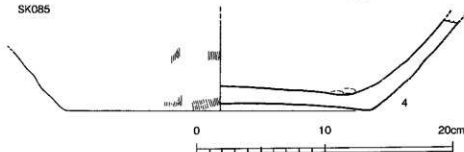
SK074



SK083



SK085

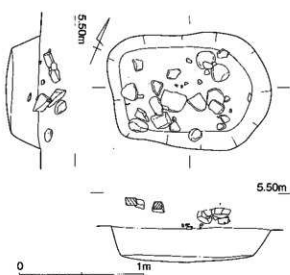


第87図 SK079・083・085出土遺物実測図 (1/3)

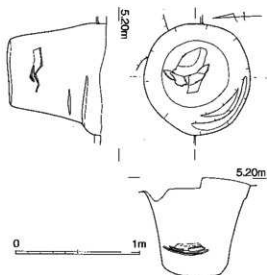
第2節 遺構と遺物

常滑焼
備前焼
東播系

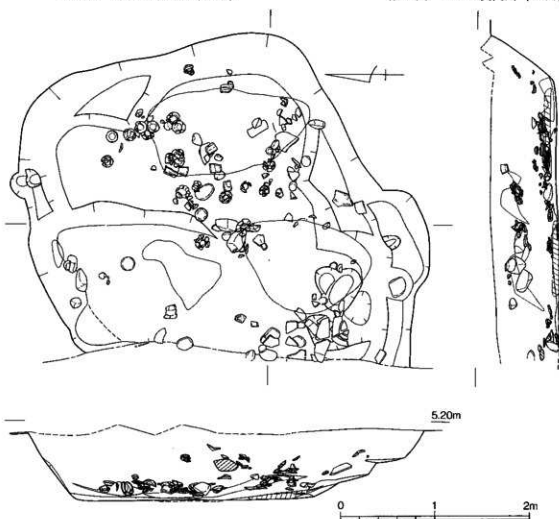
遺構内からは多くの遺物が出土し、主要なものは第91・92・93・94・95図に図示した。第91図
1・4は常滑焼の甕、2は備前焼の壺、3は東播系の須恵質土器の鉢である。5-7は外面に指任意の残
る瓦質土器の播鉢で、5・6は同一個体である。7は口径29cm、底径12cm、器高12.3cmである。



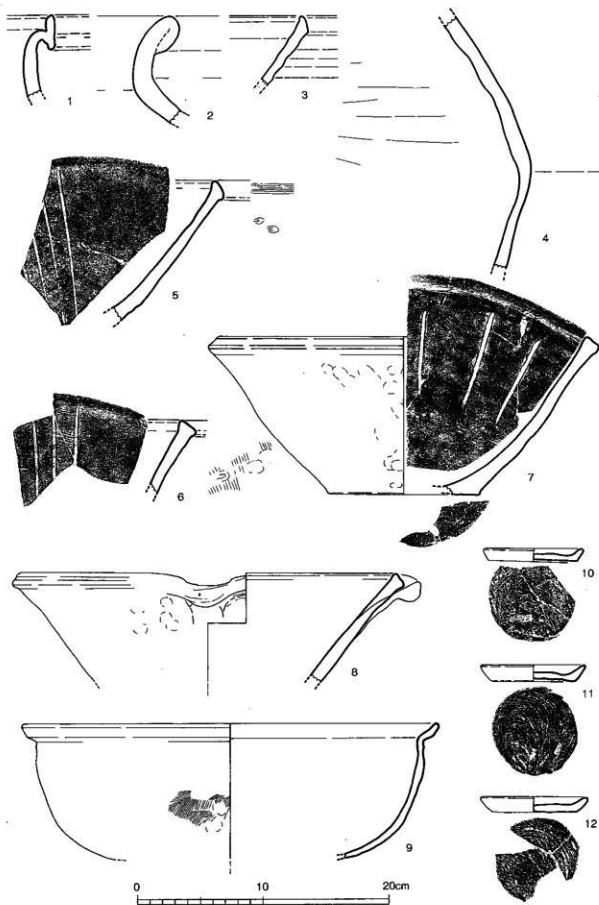
第88図 SK083実測図 (1/30)



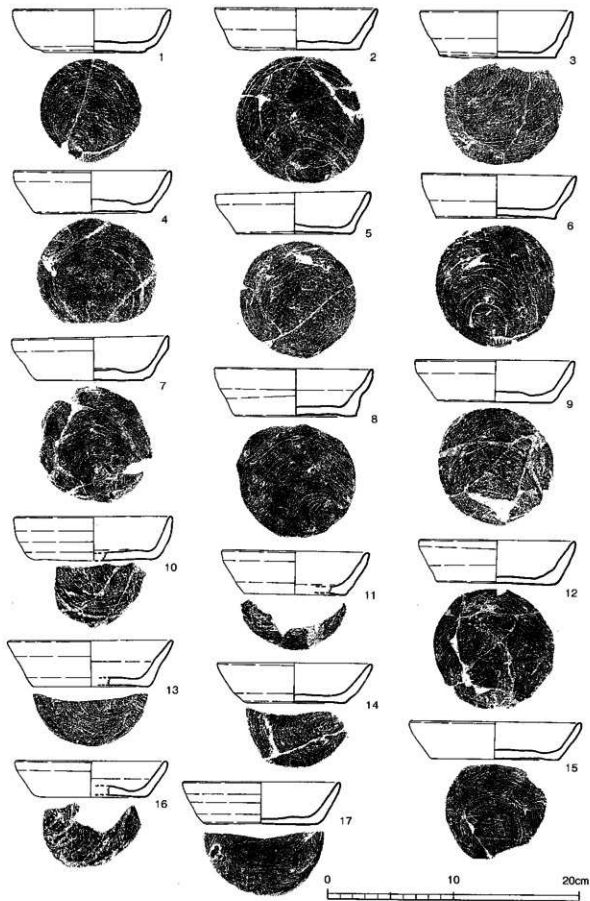
第89図 SK085実測図 (1/30)



第90図 SK086実測図 (1/2)

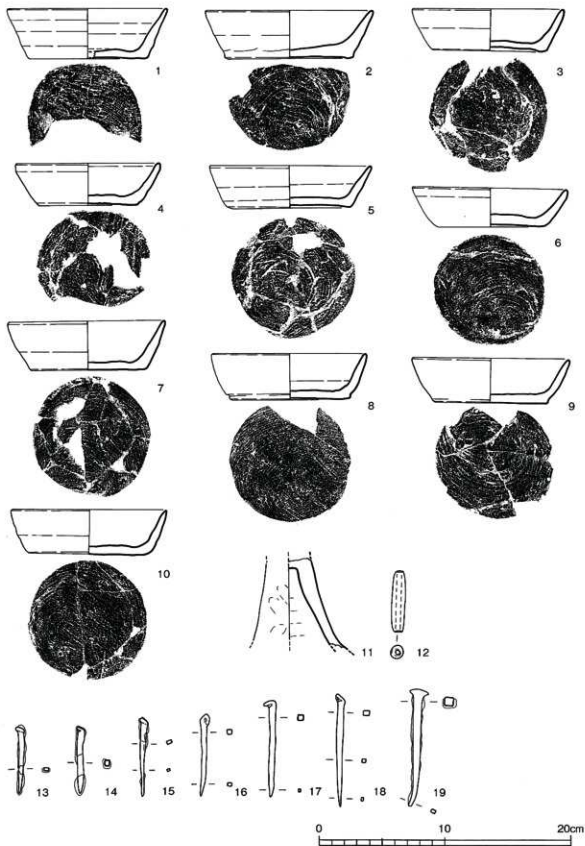


第91図 SK086出土遺物実測図① (1/3)



第92図 SK086出土遺物実測図② (1/3)

8は口径29.5cmの瓦質土器の片口鉢で、9は口径32.4cmの口縁部が外反する土鍋で、外面には刷毛目が残る。10～12は土師質土器の皿で、口径は8～8.6cm、底径6.4～7cm、器高は1～1.3cmである。



第93図 SK086出土遺物実測図③ (1/3)

第2節 遺構と遺物

第92図と第93図1～10は土師質土器の坏である。図示した27点の口径は11.5～13.8cmまでであるものの、22点が12.2～12.8cmで、平均は12.6cmである。底径は7.8～10.5cmであるが、9～9.3cmに比較的集中するものの、13点で、平均は9.1cmである。器高は、2.9～4cmであるが、3.4～3.8cmに19点が集中しており、平均は3.4cmである。

第93図11は、古墳時代に高坏で、12は重さ6.2gの土錘である。13～19は断面が方形になる鉄釘である。大きさは13・14が5.4cmで、最大は19の9.2cmで、7点ともほぼ完形品で、釘の頭部を打ち広げ、折り曲げて打面とする構造は同じである。

銅銭

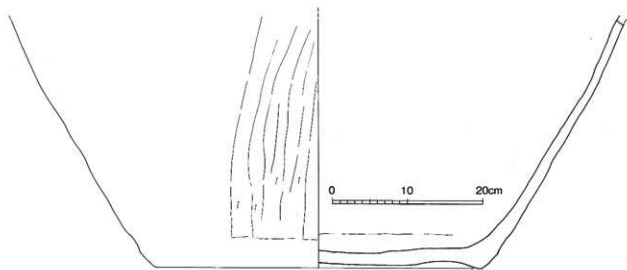
第94図は底径43cmを測る、備前焼の甕の底部である。色調は暗茶褐色をしている。第95図の銅銭は、径2.3cmであるが、錆のため判読不能である。

SK086の時期は、土師質土器の坏の形態から14世紀中葉と考える。

SK087

SK086はK-75で検出された遺構で、柱穴状遺構が3ヶ所掘り込まれている。遺構の規模は、約80cmの方形をしており、深さは約20cmである。柱穴状遺構の掘り込みにより、遺構内の遺物は明確ではないが、第62図12に図示した土師質土器が出土している。

12の坏は口径12.1cm、底径8.5cm、器高3cmである。口縁部は底部から斜め立ち上がり、器壁は底部近くが厚く、口縁端部にかけて薄くなり、やや外反する。14世紀代と考える。



第94図 SK086出土遺物実測図④ (1/5)

SK090

SK090はK-77で検出された大型土坑で第96図に図示した。遺構の規模は、南北約3.6m、東西約3mあり、深さも最深部で約1mである。床面は不規則で平坦ではない。遺構内からは人頭大前後から拳大までの礫が詰まっていた。その状況は、遺構検出面の集中部分と、その下位に間層を挟み、床面近くの集中部の2ヶ所に分かれている。

遺構内からは多くの遺物が出土しており、主要なものを第97・98・99図に図示した。第97図1は景徳鎮窯系



第95図 SK086出土銅銭実測図 (1/1)

備前焼 の碗、2・3は漳州窯系の皿、4は白磁の皿である。5・6は備前焼で、5は徳利、6は播鉢である。7～14は京都系土師器で、口径は7・8が8.6～9cm、9・10は10.6～11cm、11～13は12.2～12.4cmの3種類に分かれる。さらに、14は口径11cmであるが、器高が3.8cmで椀形をしている。15は外面に菊花文のスタンプがある口縁部が内湾する鉢である。16は古代の坏の脚と考える。径は6.6cmである。17は重さ34.6cmの土錘で、18は幅2.8cm、厚さ0.5cmの砥石の破片である。19・20の鉄器は刀子であるが、15は16.7cm残されているが、茎部分が長い。16は長さ15.4cmで、ほぼ完存しているが、茎の部分は不明である。

手水鉢 第98図は阿蘇凝灰岩製の石製品である。1は一部を欠いているが、幅29.3cmで、手水鉢状に中を長方形に抉っている。2は径約9cmの窪み2ヶ所に抉っている。

第99図は北宋の1004年初鑄の「景德元寶」である。

SK090の時期は京都系土師器の形態から、16世紀後葉と考える。

SK091

SK090はK-75から調査区の西側壁に向けて延びる溝状の土坑である。確認できる規模は、幅40cm、長さ約5mで、深さは約10cmである。この遺構から約10m南の位置で検出された溝SD051・SD137・SD156とはほぼ同じ方向性を示す。



第96図 SK090実測図 (1/40)

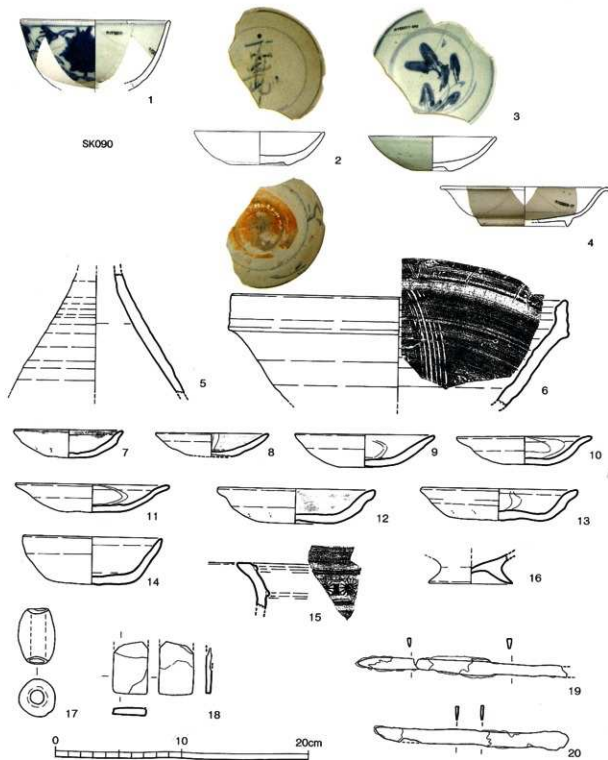
第2節 遺構と遺物

出土遺物は少ないが第62図13・14に図示した2点の土師質土器の坏がある。13の口径は13.4cm、底径は8cm、器高は3.5cmで、口縁部の形態は中位の器壁が厚くなる。14の口径は12cm、底径は8.2cm、器高3.2cmで、口縁部の器壁はほぼ均一で端部まで延びる。

時期はこうした土師質土器の坏の形態から14世紀中葉と考える。

SK101

SK101はK-76で検出された遺構で、東側はSK047、北側はSK054と重なり合う。残された遺構



第97図 SK090出土遺物実測図① (1/3)